

【資料】

# 府県裁判所草創期の聴訟・断獄手続

——新治裁判所『四課略則』（二松学舎大学中洲文庫所蔵）——

村 上 一 博

## 目次

- 一 新治裁判所の創設と三島中洲
- 二 府県裁判所草創期の聴訟・断獄手続
  - (1) 「司法職務定制」前後の司法状況
  - (2) 新治裁判所『四課略則』
    - (a) 『聴訟之部』
    - (b) 『聴訟庶務之部』『庶務之部』
    - (c) 『断獄並落着之部』
    - (d) 『出納之部』

## 一 新治裁判所の創設と三島中洲

明治期を代表する漢学者の一人であり二松学舎の創設者としても名高い三島毅（号中洲）が、明治八年に大審院が

創設される以前の、府県裁判所開設後もない時期に、裁判官として訴訟実務に携わり、明治日本における司法の近代化を模索していたこと、およびその当時の若干の資料が、今日『中洲文庫』として二松学舎大学に保管されていることについては、既に拙稿で触れたことがある。<sup>(1)</sup> 本稿では、右の中洲文庫に所蔵されている新治裁判所『四課略則』と題する資料を紹介し、<sup>(2)</sup> 府県裁判所草創期の訴訟事務手続の実態を一瞥することにした。

明治四年七月の廃藩置県の大令を受けて、全国は新たに三府七二県に再編され、十一月には県治条例が公布されて、明治新政府による地方行政制度が整備されていく。それに対応して司法制度についても、明治四年七月に刑部省と弾正台を廃して司法省がおかれ、十二月には同省内に東京裁判所が設置された（これが全国各地の裁判所の嚆矢である）。翌明治五年になると、司法卿江藤新平は、八月に、神奈川・埼玉・入間（五日付の達）および足柄・木更津・新治・栃木・茨城・印旛・群馬・宇都宮（十二日付の達）の十一県、九月に兵庫県、十月には京都・大坂の二府および静岡・浜松・額田・滋賀・三重・愛知の六県にと矢継早に裁判所を開設していく（もっとも、ほぼ全国的に裁判所が設置されるに至るのは、明治九年を俟たねばならない）。<sup>(3)</sup>

新治裁判所はこのように、全国各府県の裁判所に先駆けて明治五年八月十二日に足柄ほか八裁判所とともに設置の旨が達せられたが、<sup>(4)</sup> 司法省より八県属官に対して「不遠当省ヨリ出張可致候得共先夫迄ノ処ハ事務従前ノ通於御県御取扱有之度」と口達（八月日欠）されておき、<sup>(5)</sup> 実際の開設をみたのは、翌九月三日のことになる。<sup>(6)</sup> ちなみに、新治県は、常陸六郡・下総三郡を領して明治四年十一月に設置されたが、<sup>(7)</sup> 約三年半後の明治八年五月七日には常陸を茨城県に下総を千葉県に移管して廃県となっている。そのため、新治裁判所もまた同年五月二十三日に廃止となり、訴訟事務は千葉・茨城の両裁判所に分属された。<sup>(8)</sup>

さて、三島中洲は、松山から東上して明治五年九月に司法省七等出仕となり、十一月二十四日から東京裁判所で

聴訟事務に携わることとなったが、翌明治六年三月末日、司法省権少判事に任じられ、五月五日に新治裁判所所長として土浦に赴任している（これ以後、同裁判所が廃止される明治八年の二月に再び東京裁判所に転任の辞令を受ける迄の一年半余の間、同職にあった<sup>9</sup>）。したがって、三島は、開設後もない新治裁判所の所長に抜擢され、東京裁判所で習得した知識と経験に基づいて、維新以来の累積した諸懸案事項を処理すべく、当時模索しつつあった新しい訴訟事務処理に不慣れた吏員らの指揮監督に努めることが期待されたのであろう。

(1) 拙稿「明治初期の裁判基準——二松学舎創立者三島中洲の『手控』を手掛かりに——」（『日本文理大学商経学会誌』第一巻一号、一九九二年）。

(2) 二松学舎大学図書館所蔵『中洲文庫』整理番号・新2。

(3) 明治前期における司法制度の整備過程については、特に石井良助『明治文化史2・法制（新装版）』（原書房、一九八〇年）二〇八頁以下、および染野義信「裁判制度（法体制準備期）」（講座『日本近代法発達史——資本主義と法の発展——』6、勁草書房、一九五九年）・同「司法制度（法体制確立期）」（講座『日本近代法発達史——資本主義と法の発展——』2、勁草書房、一九五八年）『同論文ともに、のち染野『近代的転換における裁判制度』（勁草書房、一九八八年）所収」参照。

(4) 『法規分類大全』第十五巻、官職門（六）一八五頁。

(5) 『同書』一八六頁。

(6) 「九月三日司法省裁判所ヲ旧土浦藩主ノ第二開ク」（国立公文書館所蔵『茨城県史料』7、茨城県史編纂近代史第一部会編『茨城県史料・近代政治社会編1』茨城県発行、一九七四年、五五頁）。もっとも、『茨城県史料』7の新治県「警察沿革」には「八月日欠新治裁判所ヲ置カル因テ訟獄ノ事務ヲ裁判所ニ致ス……」（『同書』六〇頁）とある。

(7) 明治四年十一月に新治県庁が旧城内本丸に設置され、外丸にあった旧藩主の居宅跡に「聴訟課」および「断獄課」が設けられた（土浦市史編纂委員会編『土浦市史』土浦市史刊行会、一九七五年、六九四頁）。

ちなみに、『茨城県史料』7の新治県「県治沿革」には、「明治四年辛未十一月十四日土浦牛久若森松川富岡石岡小見川志筑麻生竜崎多古ノ十一県ヲ併セ茂木宮谷葛飾安中下妻高崎佐倉淀生実西端関宿岩槻津水戸前橋十五県ノ地ヲ割キ新治県ヲ置カレ池田種徳権令タリ東海道常陸国新治郡土浦町旧土浦藩主土屋氏ノ城址ヲ以テ本県ノ庁治トス……」（前掲『茨城県史料』

近代政治社会編Ⅰ』五四～五五頁」と記す。新治県の規模は、旧石高で示せば六一万石余、人口は約四七万人である。

(8) 『法規分類大全』第十五卷、官職門(六)二〇八～二〇九頁

このため、新治裁判所は、明治八年五月二十三日に「茨城裁判所新治出張所」、同六月には「茨城裁判所土浦出張所」と改称された(前掲『茨城県史料・近代政治社会編Ⅰ』五五頁、前掲『土浦市史』六九四頁)。

(9) 三島中洲の経歴については、前掲拙稿「明治初期の裁判基準——松学舎創立者・三島中洲の『手控』を手掛かりに——」  
 ○〇頁に挙げた諸文献を参照。とりわけ、福島正夫「在朝法曹時期の三島中洲」(『松学舎百年史』二松学舎、一九七七年、所収)は必読の文献であり、本稿も同論文に負うところが多い。

## 二 府県裁判所草創期の聴訟・断獄手続

### (1) 「司法職務定制」前後の司法状況

ところで、各府県裁判所が設置されるまで当該府県では、あるいはまた、設置後までもない府県裁判所では実際にどのような訴訟事務が行なわれていたのであろうか。<sup>(1)</sup> こうした問題を明らかにすることは、明治初期の府県裁判史研究の重要課題の一つであるが、先学の研究は十分とはいえない。<sup>(2)</sup>

「司法職務定制」(明治五年八月三日太政官達「無号」)によって、司法省および同省裁判所・府県裁判所・区裁判所など各裁判所や検事局等の構成・権限や裁判の手続きが、簡単ながらも一般的な規定をみる。<sup>(3)</sup> しかし、法典という形で纏まった民事および刑事の訴訟手続法は勿論のこと、時宜に応じて出された単行法令(なかでも、民事では明治六年七月の「訴答文例」<sup>(4)</sup> (太政官第二四七号布告)、刑事では明治六年二月の「断獄則例」<sup>(5)</sup> (司法省第二二号達)は重

要である)断片的であり、伺指令の類も少ない。

そもそも「司法職務定制」の定める訴訟事務手続自体が、各府県裁判所において、どの程度の実効性をもって行なわれていたのだろうか。

石井良助氏が紹介された、明治五年十月の印旛裁判所の民事訴訟手続概略では、「司法職務定制」に顕著な、目安・初席・落着という聴訟手続の三段階は見られず、また逆に「司法職務定制」には規定のない、済口の手続・訴状の形式内容・訴答人の書き方・証拠法・添翰請書・訴状願下ゲ案などの文例や済口の分類などが定められている。石井氏は、「司法職務定制」が「仮定ノ心得ヲ以施行可致事」と定められていた点を指摘されつつ、「少なくともはじめのうち、そこにおける裁判手続は、右定制によらず、古来の慣習によって行われたものと思われる。……政府としては司法職務定制の規定を全国的に行ないたかったに違いないが、なかなかそういうわけにはいかなかったのである。」と結論されている。また、加藤高氏は、明治九年二月頃の島根裁判所の民事裁判事務手続を紹介されながら、全体的には「司法職務定制」の目安・初席・落着の聴訟順序を保ちつつ、「済口つまり和解に重点が置かれている。さらに身代限にもかなりの程度及んでいる」と指摘され、「事件の取扱いの細部に至っては、地方毎の慣行に依らざるを得なかったであろう」と推測されている。<sup>(7)</sup>

当時の各府県裁判所などでは、一方では新しい「司法職務定制」や「訴答文例」を参照し、他方では従来の慣行をも斟酌しながら、裁判事務処理について一定のマニュアルを作成する必要性に迫られていたのである。

この必要を助長したものとして、当時の訴訟件数の膨大さが考えられる。

新治裁判所の場合、三島が赴任した当初は、『三島中洲先生年譜』によれば、昼は裁判訊問、夜は訴訟書類の閲読に寝食を忘れて懸案を処理した程の激務であったと言う。<sup>(8)</sup> (「常陸自古称健訟、且方幕末騒乱王政新施之際、訟獄不決

表 1 明治6年中各裁判所・各県聴訟総計表  
(単位：件)

	全国総計	京都裁判所	新治裁判所
裁 許	594	31	15
済 口※	9,894	—	—
訴状下ケ	35	—	—
越訴々状下ケ	57	—	—
席前済口	11,746	485	257
席後済口	11,072	142	299
願下ケ	8,058	630	366
各裁判所廻シ	1,661	91	10
各裁判所廻済口	1,362	95	22
断獄廻シ	408	4	11
合 計	44,888	1,478	980
各裁判所廻シ除テ	43,227	1,387	970
新 訴	47,850	1,688	1,060
12月31日現在	9,756	390	188

※但各県1月ヨリ6月マテ司法裁判所ハ1ヶ年分  
(『聴訟表 明治六年』(法務図書館所蔵)から作成)

者、案牘滞積、囹圄填溢、先生乃昼聴訟獄、夜閱案牘、期雪冤戮、寤眠食而決之、至一日斬凶魁<sup>(9)(10)</sup>八人。明治六・七年の全国および新治裁判所(比較のために京都裁判所の例を示しておく)民事訴訟処理件数については、法務省法務図書館所蔵の『聴訟表<sup>(11)</sup>』によって知ることができる[表1・2](全国的な刑事訴訟統計については、明治七年以前は筆者未見である)。

この統計で特徴的なのは、第一に「裁許」に至る比率が極めて低い点である。明治六年の全国統計で「各裁判所廻シ」を除いた総件数四三、二二七件中、「裁許」は僅か五九四件で約一・四%にすぎず(京都裁判所では、一、三八七件中三一件の約二・二%、新治裁判所では、九七〇件中一五件の約一・五%)、明治七年でも総件数一三一、八五六件中、「裁許」は一、七九三件で前年同様に約一・四%である(京都裁判所では、五、〇四一件中五三件の約一%、新治裁判所では二、八九七件中一三件の約〇・四%)。訴訟のほとんどは、「願下」および和解(「席前済口」「席後済口」)によって落着いている。第二の特徴は、訴訟件数の急激な増加である。明治六年から明治七年にかけて全国的にはほぼ3倍(京都裁判所で

表 2 明治7年中各裁判所・各県聴訟総計表

(単位：件)

	全国総計	京都裁判所	新治裁判所
席前済口	56,327	1,840	1,594
内外国交渉	15		
席後済口	39,334	1,406	542
内同上	170		
裁 許	1,793	53	13
内同上	27		
願 下	30,465	1,500	678
内同上	39		
各裁判所廻シ	3,284	243	49
内同上	24		
各裁判所廻済口	3,217	233	44
内同上	15		
断獄廻シ	720	9	26
内同上	3		
合 計	135,140	5,284	2,946
内同上	293		
各裁判所廻シ除テ	131,856	5,041	2,897
内同上	269		
新 訴	140,993	5,546	2,906
内同上	293		
12月31日現在	19,322	876	196
内同上	290		

(『聴訟表 明治七年』(法務図書館所蔵)から作成)

つては「その時分始審裁判所で受理したものは半数以上は即決又は翌決でありました。私共最初即決係になった時に、一日に担当する事件が十件前後であったと思ひます。誠に早いもので、犯罪があつてから判決になる間が大抵二日若しくは三日位で済んでしまつたものであります」と回顧されている。<sup>(13)</sup>

明治初期においても、かなり即決的な事件処理が行なわれていたであろうことは想像に難くない。

は3・6倍、新治裁判所では約3倍)に達している。<sup>(12)</sup>

明治六・七年当時の裁判状況を知らうる資料はないが、昭和十七年に日本法理研究会が催した座談会『明治初期の裁判を語る』の中で、明治十五・十六年頃の状況について、「民事の判決の形式といふものは相当簡単なもので……先づ大抵のものは……『…被告ノ陳述ハ口頭無証ナルヲ以テ採用セス、仍テ判決スルコト左ノ如シ』といふやうな形式でありました」。刑事事件に

府県裁判所の所長は、民事・刑事および庶務関係の全般を「総提」（司法職務定制）していたのであるから、前述の三島の『年譜』にある「寢眠食而決之」という表現もあながち誇張とも言えないであろう。

- (1) 明治五年以前の民刑事訴訟手続については、石井良助・前掲『明治文化史2・法制（新装版）』二二二頁以下、が詳しい。
- (2) 先学による優れた研究として、藤田弘道氏による足柄裁判所の設置をめぐる先駆的研究（藤田「府県裁判所設置の一齣——足柄裁判所の場合——」『法学研究』第四六巻五号、一九七三年）、加藤高氏による島根県・島根裁判所の研究（加藤「明治初年における諸県聴訟課民事裁判研究のための覚書——明治六年（一八七三年）における島根県の代書人（宿）布達とその推移を中心として——」（1）3）『修道法学』第四巻二号・第五巻二号・第六巻二号、一九八一年～一九八三年）、加藤「明治五（一八七二）年島根県の民事裁判小考——訴訟事件銘細録を通して——」『修道法学』第九巻一号、一九八六年）、加藤「『島根県裁判所民事課事務節目』について」『修道法学』第一〇巻一号、一九八七年）、石井良助氏による宮谷・木更津県の聴訟規則（石井「県庁規則」『同』『続近世民事訴訟法史』創文社、一九八五年、所収）・印旛裁判所の「訴訟人心得方概略」と愛知県の「公事訴訟願伺居雛形」の紹介（石井「明治初年の地方民事訴訟法」・前掲『続近世民事訴訟法史』所収）、石井良助氏と藤原明久氏による東京府・東京裁判所の研究（石井「明治初年の民事訴訟法」『手塚豊教授退職記念論文集』明治法制史政治史の諸問題』慶応通信、一九七七年、のち石井「近世民事訴訟法史」創文社、一九八四年、所収）、石井「聴訟規定」・前掲『続近世民事訴訟法史』所収、藤原「明治初年における東京府裁判法の展開——民事裁判をめぐる——」『神戶法学雑誌』第三五巻四号、一九八六年）などがある。
- (3) 『法令全書』明治五年、四六五～五〇〇頁、『法規分類大全』第十四巻、官職門（五）一〇六～一三四頁。  
司法職務定制については、とくに、石井良助「司法職務定制」（『続近世民事訴訟法史』創文社、一九八五年）、福島正夫「司法職務定制の制定とその意義——江藤新平とブスケの功業——」（『法学新報』第八三巻七七八九号）など、参照。
- (4) 『法令全書』明治六年、三二〇～三二三頁。  
瀧川毅「訴答文例小考」（兼子博士還暦記念『裁判法の諸問題』（上）有斐閣、一九六九年、のち瀧川『日本裁判制度史論考』大学図書、一九九一年、所収）、石川明・石渡哲「明治五年・聴訟規則（原告条例・被告条例・付録）」（『法学研究』第四四巻五号、一九七一年）、向井健「明治初年における民事訴訟法典の編纂——江藤司法卿時代を中心に——」（『綜合法学』



第六卷八号、一九六三年）など参照。

- (5) 『法令全書』明治六年、一七一四～一七一九頁。
- (6) 石井良助・前掲「明治初年の地方民事訴訟法」六四〇頁。
- (7) 加藤高・前掲「島根県裁判所民事課事務節目」について一八五～一八六頁。
- (8) 福島正夫・前掲「在朝法曹時期の三島中洲」二六～二七頁、参照。
- (9) 『三島中洲先生年譜』（洋装本一冊、門人本城實編）。
- (10) 加藤氏も、島根裁判所の『事務節目』が定められた理由について、明治五年以後の訴訟事件数の急増により「当初の少数の担当官では事件処理が困難と成ったため、経験未熟な新任の担当官のために古参の担当官がマニュアルとしてこの資料を作製し、実務処理に備え」る必要に迫られたのではないかと推測されている（加藤・前掲「島根県裁判所民事課事務節目」について一八四頁）。
- (11) 法務図書館所蔵『聴訟表 明治六年』・『聴訟表 明治七年』（貴重図書 H500 S1-27）。
- (12) ちなみに民事訴訟件数は、この後、明治八～一〇年にピークをむかえる（最高裁判所事務総局編『明治以降裁判統計要覧』一九六九年、一六頁、など参照）。
- (13) 日本法理叢書別冊四『明治初期の裁判を語る』（日本法理研究会、一九四二年）一八頁。
- (14) 『同書』一二頁。

## (2) 新治裁判所『四課略則』

さて、以下において紹介する新治裁判所『四課略則』は、三島が明治六年五月に所長として赴任の後、膨大な訴訟を前に、訴訟関係事務の統一を図るべく編集に着手し、資料中の記載年月から見ても、明治七年三月頃に纏められたと推測される。先学による明治初期の府県裁判史研究は、聴訟事務に関するものがほとんどであり、当該略則のように「司法職務定制」が定める府県裁判所のすべての分課、すなわち聴訟・断獄・庶務・出納の四課全般に互い（『聴訟

之部』・『聴訟庶務之部』・『庶務之部』・『断獄並落着之部』・『出納之部』の五冊)、したがって民事および刑事の裁判事務のみならず庶務・出納におよぶ諸取扱手続までが知りうる資料は管見の限り他に類がない。

新治裁判所『四課略則』と「司法職務定制」の規定とを比較するために、以下とりあえず、「定制」に定められている聴訟課および断獄課の庶務手続について述べておきたい。

「司法職務定制」第十六章「府県裁判所分課」は、府県裁判所の聴訟・断獄・庶務・出納の四課について規定するが、聴訟・断獄・庶務順序や各「課務ノ順序及簿書ノ義例」などは、いずれも司法省裁判所の規定が準用されている。<sup>①</sup>

(一) 聴訟すなわち民事裁判は聴訟課で処理されるが、その手続は、④目安糺・①初席・③落着の三段階に分かれる(第五十一条第三)。

④目安糺。訴状は、(府県裁判所からの送致、および越訴があれば)訴訟口詰が受け、検部の検印を経て課長に廻付し、課長は検事に授けて印を取ったのち、一件ごとに判事・解部に掛りを課し、解部が一応の尋問をなし、検事がこれに連班する。①初席。繼いで、訴状に裁判所の印を押し、被告人を召喚してこれを交付し、期日を定めて答書を出させる。法を犯すに至らず和談を乞う者はその意に任せ、然らざる者は判事・解部が原被双方を召喚して対決審問する。③落着。曲直が明白になったのち、判事が裁判を言渡し、和談する者は放還する(第九十二条)。

初席および落着の言渡しは、必ず判事が行なう(第五十一条第七)。二度目以降の節次の審問は解部が行なってもよいが、その情状は一々判事に具申すること(同条第八)。詞訟が重大で決し難いものは、正権大判事が判理する(同条第九)。裁判中に、被告人から原告人に和談し双方諍熟して解訟を願うときは、原・被告人連印の証書を徴したのち、聞届ける旨を判事より達する(同条第十二)。原・被告人を論ぜず、その事跡の疑うべき者があれば、保管人に

保責照管させる（同条第十三）。聴訟中に罪科が発露して証跡明白なときは、断獄課に送付する（同条第十四<sup>(2)</sup>）。

（二）断獄すなわち刑事裁判は断獄課で処理されるが、その手続は、<sup>(a)</sup>初席・<sup>(b)</sup>未決中・<sup>(c)</sup>口書読聞・<sup>(d)</sup>落着の四段階に分かれる（第五十二条第三）。

①初席。罪人は、（府県裁判所からの送致、あるいは速部により捕縛されれば）検部が見坐に受取らせ、その具申調書は検事を経て課長に逋付し、課長は一件ごとに判事・解部に掛りを課し、判事が一応の推問を行なう。②未決中。繼いで、軽重を酌量して、罪人を監倉に入れ、あるいは囚獄に送り、判事あるいは解部が節次推問する。③口書読聞。罪人が罪に服せば、解部が口書を記録し、犯状明白な口書案ができると、再び口書によって、逐条その異同の有無を犯人に問い、相違なきときは判事・検事が連班して、判事・解部に口書を読示させ、証書あるいは爪印を押させる。④落着。判事は口書によって、律文を照し、刑名を擬定し、流以下は専決し、死罪は本省を経て奏裁を受けたのち、判事・検事・解部が連班して、判事が罰文を言渡し、囚獄に付して決放するが、その実決しないものは本管に引渡す（第九十三条）。

初席および落着の言渡しは、軽重を論ぜず、必ず判事が行なう（第五十二条第六）。二度目以降の節次の鞫問は解部が行なってもよいが、その情状は一々判事に具申すること（同条第七）。勅奏官・華族の犯罪についての初席・落着、および難獄は、正権大判事が判理する（同条第八・九）。鞫場においては陪坐の解部が犯人の供述を記取り、掛り解部がこれを節取して口書案を作り、案が成つて判事に正を受け、属が浄写する（同条第十）。犯人の証印が終つてのち擬律し、課長の決を経て断刑して罰文を言渡し（同条第十一）。犯罪の蹤跡が已に瞭然であるのに犯人が白状しなければ、判事が鞫問し、なおも白状しなければ拷問する（同条第十二）。犯人は、未決中は軽量に従つて省中の監倉に留め置き、あるいは繫獄し、あるいは保管人に保責照管させる（同条第十三）。罪囚を保管させ、あるいは解

囚を引渡すときは、受取人に受書を出させる（同条第十五<sup>(3)</sup>）。

以上が「定制」の定める聴訟課および断獄課の庶務手続であるが、新治裁判所『四課略則』の『聴訟庶務之部』および『断獄並落着之部』と比較して、さしあたり指摘しておきたい点は、大略以下の通りである。

聴訟手続は、「定制」と同様に①目安糺・②初席・③落着の三段階に分かれているが、目安糺は解部の「専掌」とされ（『聴訟之部』第一条）、初席以前の「訴状下ケ」（同第七・八条）や「駈込訴」の処理手順（同第九条）、「席前」「席後」などの諸「済口」の手続（同三十二・四十二条）、「訴答文例」に見られない添翰請書・訴状願下ケ案・済口証文などの文例が多数収録されている（同付録）。また、「訴訟口詰」の順序や「見坐」といった庶務係官の職務内容についての詳しい規定が見られる（『聴訟庶務之部』）。

断獄手続は、「定制」に定める④初席・⑤未決中・⑥口書読聞・⑦落着の四段階が一応採られているように見えるが、極めて即決的であり、大半の規定は「落着掛」および「断刑掛」の細則である。また「断獄訴口」の順序や「断獄見坐」の心得も定められている。

「定制」の聴訟課および断獄課の庶務手続は、新治裁判所の場合もその骨子は守られていると解されるが、手続の細部に至っては、従来慣行が継続されていると言ってよいであろう。もっとも、他の裁判所における手続としては、前述のように、これまで、聴訟課についてのみ、明治五年十月の印旛裁判所や明治九年二月頃の島根裁判所の例などが知られているに過ぎず、したがって、現時点では、庶務慣行といっても、それがどの程度において新治裁判所に独自なものかを判断できないのは遺憾である。

(1) 「府県裁判所分課」の規定の要旨は次のとおりである。

①聴訟課（第六十四条）。所長は課務を「総提」（第二）し、聴訟表・聴訟一件帳・裁断言渡帳・諸受書編冊・済口証文

編冊・裁断伺録・保管人名帳・呼出帳・聴訟課日記・遞附録・訴状受取録という十二冊の簿書を管主する(第二)。一件毎の聴訟表を検事に付す(第三)。「難決ノ詞訟」は本省へ伺い指令を得て「裁断」し裁断伺録に記載する(第四)。その他「課務ノ順序及簿書ノ義例」は第五十一条・第九十二条を参照(第五)。

②断獄課(第六十五条)。所長は課務を「総提」(第一)し、断獄表・断獄一件帳・口書録・断刑録・断刑伺録・繫獄保管人名帳・罪科期限録・諸受書編冊・獄囚出入帳・病囚録・呼出帳・遞附録・断獄課日記という十三冊の簿書を管主する(第一)。一件毎の断獄表を検事に付す(第三)。「死罪及難獄疑言献」は口書を添へて本省へ伺い「擬律処分」を得て「決行」して断刑伺録に記載する(第四)。その他「課務ノ順序及簿書ノ義例」は第五十二条・第九十三条を参照(第五)。

③庶務課(第六十六条)。府県裁判所長および判事の指揮を受けて一切の庶務を受理し(第一)、本省伺録・本省達書録・本省文通録・府県下布告録・達書録・府県文通録・職員録・回達録・布告刻紙編冊・諸願編冊・諸伺編冊・諸届編冊・遞附録・出張帳・日記という十五冊の簿書を管主する(第二)。本省の指揮を経べきものは「浄写」「送進」し「其原案ヲ編録」して指揮を受けて後「朱文ヲ写入」して本省伺録に掲載する(第三)。本省からの布令は本省達書録に、尋常の文通往復は本省文通録に記載する(第四)。其府県地方庁から管下への布令は府県下布告録に編む(第五)。裁判所から「各士民ニ限リ下令」は達書録に記載する(第六)。その他「課務ノ順序及簿書ノ義例」は第十七条・第十八条を参照(第七)。

④出納課(第六十七条)。定額金出納帳・月給旅費出納帳・日日出納帳・小破営繕仕払帳・贓贖帳・贓物預帳・贓贖金上納帳・諸器物帳・物品渡帳・買物通帳・証書綴込・支庁定額金渡帳・遞附録・出納課日記という十四冊の簿書を管主する(第一)。本省から付与される定額金をもって裁判所一切の費用・官員月給・旅費及営繕等に支給し、定額金出納帳に詳記して毎年正月と七月別に一部を全亨して本省に具送する(第二)。一稜五十兩以下の営繕は便宜処分して小破営繕仕払帳に詳記して本省に届出、五十兩を越えるものは庶務課より本省に伺い許可を得て施行する(第三)。贓物贖金を蔵貯して贓贖帳に記載し毎月精算して所長の検閲に供する(第四)。贓物没収物は入札法によって売却し、代金と贖金は毎年正月と七月に本省に送達して贓贖金上納帳に記載する(第五)。その他「課務ノ順序及簿書ノ義例」は第十九条を参照(第六)。

(2) このほか、第五十一条第四・六・十・十三・十五・二十二には、聴訟課における、聴訟表をはじめとする各種の書類帳簿類の作成や検印の手順などが規定されているが、その説明はあまりに煩雑になるため、ここでは省略する。

(3) このほか、第五十二条第四・五・十・十一・十三・二十三および第五十三条には、断獄課における、断獄表をはじめとする各種の書類帳簿類の作成や検印の手順、医局の章程などが規定されているが、聴訟課の場合と同様に、ここでは省略する。

## (a) 『聴訟之部』

## 聴訟課事務署則

第一條 新訴状出レハ庶務課ヨリ正副二本トモ判事ニ呈シ掛リ解部ノ主副ヲ定メ庶務課ニ付ス庶務課ヨリ主解部ヘ受  
取之ヲ訴答文例ニ引合スヘシ而シテ熟讀考究シテ庭ニ臨ミ訴訟ノ当否ヲ糾ス之ヲ目安糺ト云フ目安糺ハ解部ノ專掌  
ナレハ最モ注意スヘシ

第二條 原告人訴フル処條理正当ニシテ証拠確實ナル片ハ主副解部押印シ凡ソ押印又ハ検印ト云フ者小印ヲ云フ実印ノ片必ス実印ト云フ其旨ヲ判事ニ具状シ  
判事ノ検印ヲ受ケ庶務課ニ付シ被告人ヲ喚出ス之ヲ奥唇喚出状ト云フ日安糺ノ上証唇ノ端ニ年月日苗字官名閣ト唇  
シ押印シテ原告人ニ下付ス

第三條 喚出状ノ差日ハ喚出ヲ受ル者裁判所ノ距離八里内ニ在ル者ハ出訴ノ日ヨリ七日目ヲ以テ定則トス八里以外ナ  
ル片ハ八里毎ニ一日ヲ加フ

第四條 喚出状ヲ原告人ヘ下付シ一件袋成ツテ庶務課ヨリ再ヒ主副解部ヘ附スル片各自聴訟表ニ訴訟銘并標記原被告  
人ノ住所身分氏名出訴ノ年月日答書ノ日番号等ヲ詳細登記スヘシ

第五條 原告人他管ニシテ其管轄廳ノ添書ヲ以テ訴フルモ前條ニ準ス

第六條 被告人他管轄ニ在ル片ハ目安糺ノ上其廳ヘノ添唇草稿ヲ作り付録第一号ヲ見合スヘシ判事ノ検印ヲ經テ訴状正副本ト共ニ庶  
務課ニ付ス

第七條 原告ノ訴フル處非理ナル片ハ其旨趣ヲ判事ニ具陳シ一應不條理ノ廉々ヲ説諭シ悔悟願下ケヲ乞ヘハ書面ヲ出  
サシム是ヲ願下ト云フ悔悟セス強テ願立レハ不條理ノ廉々ヲ挙ケ取揚ニ不相成旨ヲ申渡シノ写ト訴状ト共ニ下附ス

是ヲ訴狀下ト云フ 付録第二号ヲ  
見合スヘシ

第八條 訴狀下ケ願書ニハ番号ヲ朱記シ訴狀副本ノ表ニ説論ノ要旨ヲ朱唇シ主解部押印シ願唇ト共ニ判事ノ検印ヲ經テ正本ヲ下ケ渡シ受唇ヲ出サシム 付録第二号ヲ  
見合スヘシ 右副本ニ判事及ヒ主解部押印シテ副本並願唇ト共ニ庶務課ニ付ス

第九條 哀訴愁願等ニテ駁込訴アル片ハ其情実ヲ糾シ條理正当ニシテ憑拠アラハ訴答文例ニ因リ訴狀ヲ出サシム非理ニシテ無証拠ナル片ハ第七條第八條ニ準シ臨機區処ス

第十條 同日ニ出訴シテ原被告ヲ分チ難キ片ハ前キニ訴狀ヲ出シタル者ヲ以テ原告タラシム而シテ答唇ヲ出サシムルハ第三條ノ法ニ從フヘシ

第十一條 臨時原被告人並引合人ホヲ喚出ス (ルの脱か) 片ハ各自ノ喚出帳ニ其住所身分氏名ト年月日出差紙喚或ハ飛脚同道喚又ハ宿喚等ノ分別ヲ記シ小印ヲ押シ庶務課ニ付ス

第十二條 被告人答唇ヲ出セハ一件袋ト共ニ庶務課ヨリ主解部へ受取り答書ノ趣意ヲ審案シ 訴答文例ヲ  
照スヘシ 裁許見込ヲ記載シ訴狀ニ添ヘ其袋中ニ納メ初席ノ日ヲ小片紙ニ記シ之ヲ袋ノ表ニ糊着シ判事ニ呈ス其見込ノ要旨並ニ答唇ノ大意ヲ聴訟表ニ登記ス

第十三條 對決日ハ答唇出ルノ翌日ヲ以テ定則トス之ヲ初席ト云フ

第十四條 初席ニハ判事一件袋ヲ持シ庭ニ臨ム主解部陪坐シ原被告兩告ノ上申スル要旨ヲ白紙ニ唇ス之ヲ口唇ノ草稿トシ調ヘ終テ一件袋ヲ主解部ヘ付シ退席ス

解部代理ノ時ハ主副連坐審理ス

第十五條 一日ニ数名ノ初席アル片ハ出訴ノ前後ニ從ヒ次第ニ審判ス然共支柄ニヨリ判事ヨリ先後ノ差図ヲ為スモアルヘシ又掛リ解部差支アル片ハ此限ニ非ス

第十六條 對決審判ノ上訴狀答唇ノ要旨ト銘々申立ル処ノ情願トヲ口書ニ淨写シ判事解部各員氏名ヲ署シ押印ノ上掛  
リ解部庭ニ臨ミ原告ノ口書全文ヲ読聞セ異議ナキハ直ニ調印ナサシメ裁許見込書并ニ裁判狀ヲ作り庶務課ニ附  
ス淨書ナツテ判事庭ニ臨ミ裁判ヲ言渡ス

第十七條 裁判言渡シノ片ハ主解部陪坐シ言渡シ終テ其裁判狀ノ写ヲ主解部ヨリ見坐ニ下付シ見坐之ヲ原告人ニ分  
配ス各自聽訟表見込ノ部ニ裁判ノ要旨ヲ登記シ結局ノ部ニ年月日裁許ト登記ス身代限り裁判并ニ預審中又ハ主タル  
裁判ニテ控告ヲ願フモ亦漸次之ヲ増記ス

第十八條 經界ヲ争フ訴訟ノ裁判唇ハ原告ヨリ繪圖ヲ出サシメ庶務課ニ付シ其裁判ノ全文ヲ裏唇シ訴答ヘ下付ス

第十九條 身代限濟方ノ裁判申付ル片ハ原告人又ハ其代人并代唇人及ヒ其町村戸長ヲ立會セ負債主ノ所有物ヲ調査  
セシメ其調唇ヲ出スニ抵償トシテ差押フヘキ物品ナク又証唇面ニ引受人モナキハ其証唇ニ裏唇シ債主ニ下付ス  
付録第三号ヲ  
見合スヘシ 若シ所有物ヲ調査スル節債主又ハ其代人其場ニ立會スシテ代唇人ノミヲ遣サンヲ求ムル片ハ情願ニ任ス  
負債主ハ必ス立會フヘシ

第二十條 抵償トシテ差押フヘキ品類アル片ハ揭示案ヲ作り明治六年第九十五  
号御布告ヲ照スヘシ庶務課ニ附シ六十日間揭示シ且入札拂又ハ  
糶賣ホノ順序ハ明治七年第三十四号御布告ニ依リ処分ス

第二十一條 揭示中出訴スル者ハ前條新訴ノ順序ヲ以テ審判シ相違ナキ旨負債主申答フル上ハ賣拂代金ヲ以テ各種ノ  
請求ノ權利ニ從ヒ先キ取ノ特權ノ前後ヲ商量シ其金高ニ応シ配分ス若シ請求者出訴ノ証唇ハ判取帳附込帳ノ類ニシ  
テ其帳簿ニ直々裏唇ヲ為シ難キ節ハ之ヲ証文ニ改サセ式ニ從ヒ裏唇ス

第二十二條 負債主ノ身代限ヲ以テ悉皆濟方ナル片ハ原告人ヨリ届唇ヲ出サシメ付録第五号ヲ  
見合スヘシ之ニ判事主副解部檢印シ  
テ一件袋ニ納ム若不足スル片ハ証文ニ裏書シ付録第六号ヲ  
見合スヘシ其届唇ニ不足金裁許ニ至ルノ明文ヲ加ヘシム



第二十三條 不足相立原告人より引受人ニ係ル片ハ解部カ前條ノ届唇ヲ閱シ相違ナキ上ハ之ヲ判事ニ具陳シ引受人ヲ喚出シ訴状荅唇ト共ニ之ヲ下付シ又ハ荅書ヲ出サシメ初席ニ准シ之ヲ對審ス原告人ト引受人ヲ對審スル片ハ負債主ヲ出席セシムルヲモアルヘシ

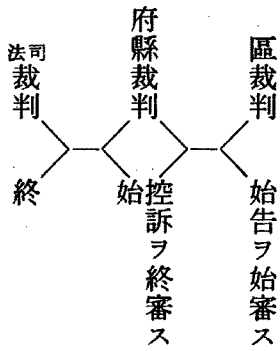
第二十四條 引受人モ亦タ身代限ヲ以テスル片ハ負債主ニ均シク第十九條ヨリ第二十一條マテ准シ処分ス悉皆返償ニ至ラハ原被告并引受人連署ノ届唇ヲ出シ(サの脱カ)附録第七号ヲ見合スヘシ之ニ判事主副解部検印シテ一件袋ニ納メ亦不足スル片ハ証唇ニ裏唇シ原告人ニ下付ス附録第八号ヲ見合スヘシ

第二十五條 難決及ヒ規程ナキ事件ハ判事ノ命ニ依リ解部裁判伺唇ヲ作り之ニ判事主副解部押印シテ庶務課ニ附シ本省指令ヲ待テ裁断ス

第二十六條 裁判申渡ノ節原告人他管轄ノモノナレハ裁判狀ノ写ヲ添ヘ回報案ヲ作り附録第九号ヲ見合スヘシ庶務課ニ附ス身代限裁判ノ片ハ揭示済ミ返償ヲ受シ届唇ノ正副本ヲ出サシメ其副本ト裁判狀ノ写トヲ添ヘ回報ス

(欄外書入)

「始審終審ノ別如左



始テ區ニ訴ル權限ノ者ハ府縣ニテ終審ヲ為ス始テ府縣ニ訴ル者ハ司法ニテ終審ヲ為ス」

第二十七條 原被両告之内裁判不兼服ニテ控告ヲ為サンスルノ願唇ハ正副本ヲ出サシメ正本ニ判査ノ検印ヲ押シ主副解部押印シ一件袋ニ納ム其副本ニ添書ヲ作リ<sup>附録第十一号ヲ見合スヘシ</sup>訴状荅唇口唇裁判状ノ写ホニ目錄ヲ付シ<sup>付録第十号ヲ見合スヘシ</sup>庶務課ニ付ス

第二十八條 裁判兼服ノ者ヘハ一方不兼服ニテ控告致ス旨掛リ解部ヨリ申渡シ追テ上等裁判所掛合アリ喚出迄帰村帰町ヲ聴ス

第二十九條 裁許前控告ヲ願フ片ハ第二十七條ニ照準シ添唇并書類目錄ヲ付シ原被両告人トモ之ヲ上等裁判所ニ出ス  
第三十條 裁許前後トモ控告ヲ願ヒ添唇成テ封唇シ庶務課ヨリ掛リ解部ヘ受取り控告聞届ル旨言渡シ封唇ヲ下ケ渡シ受唇ヲ出サシム<sup>附録第十二号ヲ見合スヘシ</sup>之ニ判事主副解部押印シテ同課ニ付ス

第三十一條 控告ノ者上等裁判所ノ裁判ニ服シ回報ト共ニ之ヲ届ケ出ル片ハ他管済口ト均シク處分ス

第三十二條 對決ノ上示談取極済方延期ヲ願フ時ハ必ス原被告人連印ノ唇面ヲ出サシム之ヲ對談書ト云フ<sup>附録第十三号ヲ見合スヘシ</sup>

第三十三條 對談唇ニハ判事検印終テ日延聞届聴訟表ニ其旨ヲ記載シ席ノ日ヲ聴訟表中並一件袋ノ表ニ記シ其裡ニ日延日限ヲ書ス

延期定日ニ至リ對談ヲ違約スル片ハ前日ノ約定ニ基キ説諭シ再對談書ヲ出サシムルコアル時ハ前條ニ准ス

第三十四條 前日ノ約ヲ遂ケ原被両告連印シテ解訟ノ証唇ヲ出ス之ヲ席後済口証文ト云フ<sup>付録第十四号ヲ見合スヘシ</sup>

第三十五條 席後済口証文事実齟齬ナキ時ハ其表紙ニ番号ヲ朱記シ判事主副解部押印シ解訟ヲ聴届再ヒ之ヲ判事ニ呈ス解訟ヲ聞届クルハ判事ノ職掌ナレバ判事用多ナレハ其旨原被ヘ申聞解部代理ス

解訟シテ聴訟表結局ノ部並一件袋ノ表等ヘ年月済口ト朱記シ訴訟銘ノ上並表ノ上等ニ朱抹ヲ加ヘ袋ヲ庶務課ヘ付シ一件落着トナル

第三十六條 對決前後済延期ノ答旨正副本ヲ出シ一件袋ト共ニ庶務課ヨリ受取ル片訴答文例ヲ見合スヘシ 副本ニ判事ノ検印ヲ經テ

主副解部押印シ主庭ニ臨ミ原被両告ヲ整理セシメ返済延期ヲ為シタル旨ヲ問ヒ相違ナキ片ハ直ニ日延聞届クル旨ヲ

言渡ス

第三十七條 延期ノ約ヲ遂ケ原被両告連印シテ解訟ノ證旨ヲ出ス之ヲ席前済口證文ト云フ附録第十五号ヲ見合スヘシ

第三十八條 席前済口證文事實齟齬ナキ片ハ第三十五條ニ准ス

第三十九條 對決前熟議解訟ノ答旨正副本ヲ出シ一件袋ト共ニ之ヲ庶務課ヨリ受取ル時印訴答文例ヲ見合スヘシ 其事實相違ナキ

片ハ正本ニ判事ノ検印ヲ經主副解部押印シテ第三十五條ニ准シ解訟ヲ聴シ副本ヲ一件袋ニ納ム

第四十條 對決前後訴答示談ノ上身代限ヲ以テ済方ヲ為ス旨申出ル片之ヲ判事ニ具陳シ第十九條ニヨリ第二十四條迄

ニ准シ処分シ裁許ノ節届旨ノ出ルヲ對談ノ時ハ済口證文ニ換フ附録第十六号ヲ見合スヘシ

第四十一條 原告人他管ヨリ來ル者審判中熟議解訟ノ答又ハ對決前後解訟ヲ願出ル片ハ其答旨並済口券ノ副本ヲ添回報案ヲ作リ付録第十七号ヲ見合スヘシ之ニ判吏ノ検印ヲ經テ共ニ庶務課ニ附シ一件ハ第十七條第一項並第三十五條第一項ニ准シ處分

ス

第四十二條 被告人他管轄ニアツテ其廳へ送付スル後審判中熟議解訟ノ答又ハ對決前後解訟或ハ裁判言渡ヲ受ケ答旨

並済口券裁判狀ノ写等へ回答旨ヲ副へ庶務課ヨリ受取ル片モ第十七條第一項並第三十五條第一項ニ准シ處分シ原告

人婦村或ハ婦學ヲ聴ス

第四十三條 訴訟審判中原被両告ノ内罪科発露シ結局贓物追徴ホニ至ルモノハ仮口旨ヲ取り訴狀答旨ノ副本ト共ニ取

調順序ヲ添旨シ附録第十八号ヲ見合スヘシ之ニ判事主副解部押印シ一件旨類ヲ庶務課ニ附シ第三十五條第一項ニ准シ年月日断獄廻ト

朱記ス之ヲ断獄廻ト云フ

第四十四條 訴訟ニ關係ナキ微罪遅参不参諸罰則等ノ罪科發露スル時ハ其始末昏ヲ出シソ其住所氏名ヲ通送録ニ記シ

判事ノ検印ヲ取り始末昏或ハ證據物共ニ庶務課ニ付スル前條ノ如シ〔付録第十九号ヲ見合スヘシ〕

第四十五條 犯罪露頭スル片庭ニ於テ縛シ或ハ一時拘留スルモ其罪ノ輕重ニ從ヒ判事ニ具陳シ決ヲ取ツテ之ヲ処分ス

第四十六條 入獄并監倉留ノ者ハ保管人名録ニ記シ判事ノ検印ヲ取り之ヲ庶務課ニ付ス一件裁決ノ後解放或ハ斷獄課

ニ送付スルモ亦同シ〔付録第二十号ヲ見合スヘシ〕

第四十七條 對審ノ上証昏不正ト決スル片ハ之ヲ引揚ケ庶務課ニ預リ公券ヲ所有者ニ下付シ〔付録第二十一号ヲ見合スヘシ〕其始末昏或ハ

仮口昏ヲ取り之ニ添昏シ〔付録第二十二号ヲ見合スヘシ〕庶務課ニ付シ斷獄課ニ廻サシム

第四十八條 証昏一通ニシテ訴訟ナス片ハ不正ト決スレハ證據ハ前條ノ如ク処分シ訴狀ハ願下ケトシ第八條ニ准シ処

分ス荅昏モ亦下ケ渡シ受書ヲ出サシム〔付録第二十三号ヲ見合スヘシ〕之ニ判事主副解部押印シ庶務課ニ付ス

第四十九條 証昏數通ノ内一通或ハ二通不正アツテ訴訟ニ關係ナキモノハ一件落着ノ上第四十六條ニ准シ之ヲ処分ス

第五十條 訴訟審判中原被告人ノ内逃亡又ハ喚出シテ受ルノ後失踪スル片ハ其町村戸長ノ届昏ト共ニ之ヲ判吏ニ具陳

シ捕縛掛合ノ文案ヲ作り検印ヲ經主副解部押印シテ検事局ニ廻ス〔付録第二十四号ヲ見合スヘシ〕

捕縛ヲ掛合ノ草稿ヲ作りテ庶務課ニ付ス〔付録第二十五号ヲ見合スヘシ〕

第五十一條 被告逃亡或ハ失踪スル片ハ訴狀ハ願下ケトシ第八條ニ准シ処分シ其証書ニハ逃亡失踪ノ旨趣ト更ニ出訴

ノ期限ト下ケ紙ニ昏シ〔付録第二十五号ヲ見合スヘシ〕原告ニ下付ス

第五十二條 被告人並引合人等喚出狀ヲ再度違背シ出テサル片ハ之ヲ判吏ニ具陳シ引立掛合ノ文案ヲ作り検印ヲ經テ

主副解部押印シテ検吏局ニ廻ス〔付録第二十六号ヲ見合スヘシ〕

聴訟課事務署則附録

第一号

被告人他管轄ニアリ其廳へ原告人ヲ送付スル添翰

(判事)

某裁判所長

苗字官名殿

某裁判所長

苗字官名

(主副)

何<sup>府</sup>管下何国何郡何村<sup>商農</sup>何之誰ヨリ何<sup>府</sup>管轄何國何郡何村<sup>商農</sup>何之誰へ相掛リ何々之儀訴出取糺倒處無餘儀次第ニ付原告人並代書人へ訴状相副差廻シ候條可然御裁断有之度此段申入候也  
年号何年何月何日

第二号

訴状非理ナルヲ了解セシキ訴状下ケ願書並表紙

(判事)

年月日

訴状下ケ願書

番号

(主副)

住所身分 氏名

住所身分

原告人 氏名

訴状下ケ願書

右住所身分氏名へ掛リ何々ノ儀訴上候處御取糺之上何々ノ廉權利無之何々ハ不條理御説諭之趣奉兼服候因テハ前段奉

差上候訴狀御下ヶ切被御下置候様仕度奉願候

年月日

氏名印

住所身分

代書人 氏名印

某御裁判所長

苗字官名殿

第三号

訴訟非理ニシテ願下ケシタル片ノ受書並表紙

(判事) 年月日

願下ケ訴狀御受書

番号

(主副)

住所身分 氏名

住所身分

原告人  
或ハ原告代言人 氏名

願下ケ訴狀御受書

右住所身分氏名へ掛リ何々之儀訴上候處何々旨發明仕因テ訴狀御下ヶ奉願候處則御下ヶ渡シ相成正ニ奉受取候依之御  
受書差上申處如件

年月日

氏名印

住所身分

某御裁判所長

苗字官名殿

代書人 氏 名印

第四号

身代限之片差押フヘキ物品ナク引受人モ無キ時證書ヘ裏書

表書ノ元利金何拾何円相滞ル旨訴出ルニ付<sup>主借</sup>何之誰身代限申付ル處抵償トシテ差押フヘカラサル品ノ外入札拂可相成  
動産不動産無之旨立會之<sup>町役人</sup>共一同申出ルニ付<sup>主借</sup>何之誰ハ勿論其相續人ニ至ル迄身代持直シ次第更ニ濟方可受者也  
年月日  
某裁判所印

第五号

身代限ヲ以悉皆濟方ナル片或ハ不足スル片ノ届書並表紙

(判事) 年月日

(主 副)

身代限皆済御届書

或ハ身代限濟方不足御届書

番号

原告人 住所身分 氏 名  
被告人 住所身分 氏 名

身代限皆済御届書

或ハ身代限済方不足御届書

原告人 住所身分 氏名  
被告人 住所身分 氏名

一金何百何拾圓

滯金願高

一金何百何拾圓

被告人氏名所有物賣拂金高

内金

訴訟入費金トシテ被告人氏名ヨリ原告人氏名へ受取之

一何拾何円

同

滯金願高<sup>不足スル片ハ</sup>エ被告人氏名ヨリ原告人氏名へ請取之

一何百何拾円

残金

不足分<sup>不足ナキ片ハ</sup>

一何百何拾円

右ハ先般身代限済方御裁断之上御規則日限揭示相済負債主氏名所有物賣拂代金ヲ以外願人一同金高ニ應シ配當金<sup>外願人</sup>ハ之ヲ件之通済方<sup>不足ノ片ハ不</sup>相成候間<sup>引受人アル片ハ此上ハ引受人召出サレ約</sup>訴答連印ヲ以此段御届申上候以上

年月日

原告 氏 名印

住所身分

代書人 氏 名印

被告 氏 名印

住所身分



某御裁判所長

苗字官名殿

代書人 氏 名印

第六号

身代限ヲ以済方不足スル片証書へ裏書

表書之元利金何百何拾圓相滯ル旨訴出ルニ付<sup>主借</sup>何之誰身代限申渡動産不動産等入札拂申付ル處金何百何拾円ニ相成ル  
ニ付受取ノ残ル何百何拾円ハ<sup>主借</sup>何之誰ハ勿論相続人共ニ至ル迄身代持直シ次第更ニ済方可受者也

年月日

某裁判所印

第七号

引受人身代限ヲ以悉皆返償スル片又ハ不足スル片ノ届書並表紙

(判<sup>主</sup>決) 年月日

(主<sup>主</sup>副)

引受人身代限済方御届書

或ハ引受人身代限済方不足御届書

番号

原告人	住所身分	氏 名
被告人	住所身分	氏 名
引受人	住所身分	氏 名

引受人身代限濟方御届書

或ハ引受人身代限濟方不足御届書

原告人 住所身分 氏名

被告人 住所身分 氏名

引受人 住所身分 氏名

一金何百何拾圓

滯金願高

内金

被告人氏名所有物賣拂代金ノ内ヨリ原告人氏名へ年月日請取之

一何百何拾圓

一金何百何拾圓

引受人氏名所有物賣拂金高

内金

訴訟入費金トシテ引受人氏名ヨリ原告人氏名へ受取之

一何拾圓

同

滯金願高不足スル片ハ  
ノ内ト認ムエ引受人氏名ヨリ原告人へ受取之

一何百何拾圓

總計殘金

不足分不足ナキ片ハ  
之ヲ省ク

一何百何拾圓

右者先般負債主氏名被告人所有物賣拂代金ニテ濟方不足相成引受人氏名ヲモ身代限濟方御裁判之上御規則日限揭示相濟  
氏名引受人所有物賣拂代金ヲ以外願人一同金高ニ應シ配当金外願人ナキ片ハ  
ハ之ヲ省ク件之通濟方不足スル片ハ不  
足ノ二字ヲ加フ相成候間原被告並引受人  
一同連印ヲ以此段御届申上候以上

某御裁判所長

苗字官名殿

第八号

引受人身代限済方不足スル并證書へ裏書

表書ノ元利金何百何拾円相滞ル旨訴出ルニ付<sup>主借</sup>何之誰身代限申渡動産不動産等入札拂申付ル處不足相立ルニ付<sup>請人</sup>何  
之誰ヲモ身代限ヲ以テ償却為致所都合金何百何拾円ニ相成ルニ付受取ノ残ル何百何拾円ハ<sup>主借</sup>何之誰<sup>請人</sup>何之誰ハ勿論  
其相續人共ニ至ルマテ身代持直シ次第済方可受者也

年月日

某裁判所印

原告 氏 名印

住所身分

代書人 氏 名印

被告 氏 名印

住所身分

代書人 氏 名印

引受人 氏 名印

住所身分

代書人 氏 名印

第九号

原告人他管轄ヨリ来リシ訴訟ヲ裁判セシ回答

某裁判所長

某裁判所長

苗字官名殿

苗字官名

何<sup>府</sup>管下何國何郡何村<sup>農商</sup>氏名ヨリ何<sup>府</sup>管轄何國何郡何村<sup>農商</sup>氏名へ掛リ何々之儀訴出御取糺ノ上原告人並代書人へ訴状

ヲ添差廻サレ可然裁判可致旨御掛合ノ趣致兼知被告呼出シ審判之上別紙写之通<sup>裁判状ノ</sup>及裁断<sup>身代限之片ハ裁断ノ下ニ揭示濟返償相受候旨申出ト書加フヘシ</sup>候

依之<sup>同上ノ片ハ書相添ト認ム</sup>原告人<sup>婦京邑</sup>申付候此段及御回報候也

年月日

—— 法 律 論 叢 ——

第十号

終審裁判不兼服ニテ控告ヲ願フ片差出ス目錄

目 録

一 訴 状

壹 冊

一 答 書

全

一 原被告人口書

貳 <sup>綴通</sup>

一 裁判状写

壹 綴

但経界爭論ノ片ハ繪図ヲ副へ出スヘシ

右之通差出候事

年月日

某裁判所

## 第十一号

終審ノ裁判不兼服ニテ控告ヲ願フ片添書

司法裁判所

某裁判所長

御中

苗字官名

何<sup>府</sup>管轄住所身分氏名ヨリ何<sup>府</sup>管下住所身分氏名へ掛リ何々訴審判ノ上及裁判候處<sup>原告人カ被告人カ一</sup>不兼服ノ廉有之控告  
致シ度旨別紙之通<sup>願書ヲ</sup>申出則聞届<sup>原告人カ</sup>へ目錄之通相副代書人共差出候間可然御裁断有之度此段申進候也

年月日

## 第十二号

控告聞届封書下ケ渡ス片ノ受書並表紙

(判事)

年月日

(主)(副)

司法省御裁判所へノ御封書御下渡御受書

番号

住所身分氏名

住所身分氏名

御封書御下ケ渡御受書

一司法省御裁判所へノ御封書

何通

右年月日御裁判ノ後控告致シ度旨奉願候處前書御封書御下ケ渡シ相成正ニ奉受取候依テ明何日發足仕着京之上早速差上可申候依之御受書差上申處如件

年月日

氏 名 印

住所身分

代書人 氏 名 印

某御裁判所長

苗字官名殿

第十三号

對決ノ上示談取極差出ス對談書並表紙

○ 年月日

何々訴對談書

○○

住所身分氏名

住所身分

原告人 氏名

住所身分

被告人 氏名

何々訴對談日延願旨

一願高金何百何拾円

内一当金何拾何円

来ル何月何日原告人へ受取之可申答

一残金何拾何円

新規証文ニ相改可申答

一訴訟入費金御規則ノ通

原告人或ハ  
被告人ヨリ

償却可仕答

右今何日對決ノ上示談取極メ候ニ付期日ニ至リ請取渡シ之上濟口唇差上申度依テ何月何日出日延御猶豫奉願候以上

年月日

原告 氏 名印

住所身分

代唇人 氏 名印

被告 氏 名印

住所身分

代唇人 氏 名印

某御裁判所長

苗字官名殿

第十四号

對決後濟口証文並表紙

○ 年月日

對決後濟口書

○○

番号

住所身分

原告人 氏 名

住所身分

被告人 氏 名

## 差上申済口唇之事

一住所身分原告人氏名申上候私儀住所身分氏名ヨリ何々ノ儀申之ニ付去何年月月中約定取極メ則証書為取替置候處期月ニ至リ異約仕候間取詰度々掛合ニ及ヒ候得共等閑置際限無之ニ付右約定ヲ遂候様御裁断被成下度旨何年月何日訴上候

一住所身分被告人氏名申上候前唇原告人何之誰訴上候通何々ノ約定取極候ニ相違無之候得共其後原告人ヨリ何々ノ儀申越候ニ付住所身分何ノ誰儀立合人ニ致シ何年月月中前唇約定ニ付再約取極則証書取置候旨答上候

一住所身分引合人氏名申上候前書原被両告何年月何日何々約定ニ付私儀立合候ニ相違無之候へ共何々ノ次第ニ有之旨申上候

右之通原被両告申立對決ノ上立合人氏名御呼出シ猶御審判中之処何年月何日再約定取極何々明文有之上ハ原告人氏名何々約定ヲ相遂可申權利無之被告人氏名再約ニ付テハ前約ノ義務ヲ免レ候得共再約證唇中何々或ハ年号略記ノ廉有之ニ付是又再約定遂ヘク權無之引合人氏名右約定ニ付何々ノ義務ヲ尽サス不念有之候段銘々發明仕更ニ何々ノ約定取極証唇為取替申候且訴訟入費ノ義ハ御規則之通銘々ヨリ償却仕以来一同無申分熟議解訟仕候依之為後証済口書差上申處如件

年月日

住所身分



第十五号

對決前済口証文並表紙

○ 年月日

對決前済口唇

某裁判所長

苗字官名殿

原告人 氏 名印

住所身分

代書人 氏 名印

住所身分

被告人 氏 名印

住所身分

代唇人 氏 名印

住所身分

引合人 氏 名印

住所身分

代唇人 氏 名印

○○

番号

住所身分

原告人 氏 名

住所身分

被告人 氏 名

差上申済口書ノ事

一住所身分原告人氏名申上候私儀住所身分氏名ヨリ金子或ハ何品入用之由申之ニ付引当アラハ此書入ヘシ去ル何年何月中證書取之  
金何拾何円或ハ何々幾品用達遣シ候処期月過去リ返済不仕度々催促ニ及ヒ候得共等閑置際限無之ニ付早々返済仕候  
様御裁断被成下度旨何年何月何日訴上候

一住所身分被告人氏名申上候前書原告人氏名訴上候通金子或ハ何々品借用ノ儀相違無之候得共連々困窮之折柄期限異  
約相成候間對決前原告人へ示談申入金子調達或ハ何品取寄中何年何月何日迄日延猶預相受ケ候旨答上候

右之通双方申立對決前示談日延願上ケ滞高金何拾何内或ハ何々幾品之處尚金拾円或ハ何々幾品原告人へ請取之殘金何  
十円或ハ何品ハ期限相立新規証文ニ相改且訴訟入費ハ被告人ヨリ償却仕以來訴荅無申分熟談内済仕候依之為後証済口  
書差上申處如件

年月日

住所身分

原告人 氏 名印

住所身分

代書人 氏 名印

住所身分

某御裁判所長

苗字官名殿

第十六号

對決前後訴荅示談之上身代限済方ノ時済口証文並表紙

(判事) 年月日

對決前後身代限返償済口書

番号

差上申済口書之事

一原告人ノ云々

一被告人ノ云々

一引受人ノ云々

引受人ナキ片  
ハ之ヲ省ク

被告人 氏 名印

住所身分

代書人 氏 名印

(主) (副)

住所身分

原告人 氏 名

住所身分

引受人アル片ハ被  
告ノ次ニ存入ヘシ

被告人 氏 名

右之通原被告兩告或ハ並引申立或ハ對決前後被告氏名身代限ヲ以テ返辨可致旨示談取極依之所有物賣拂代金何百何拾何円ノ内金何拾円訴訟入費并臨時入費被告人ヨリ償却尚金何百何拾円ヲ以外願人一同金高ニ應シ分配仕原告人氏名滯高金何拾何円ノ内金何拾何円受取之殘金何拾何円或ハ引受人氏名ヨリ弁償或ハ身代限所有物以下本文ニ准ス不足相立證文へ御裏肩頂戴仕原被告兩告或ハ並引無申分熟談内濟仕候依之為後証濟口書差上申處如件

住所身分

原告人 氏 名印

住所身分

代唇人 氏 名印

住所身分

被告人 氏 名印

住所身分

代唇人 氏 名印

住所身分

引受人ナキ片ハ之ヲ省ク

引受人 氏 名印

住所身分

氏 名印

住所身分

代唇人 氏 名印

某御裁判所長

苗字官名殿

第十七号

原告人他管ヨリ来リ審判中解訟ヲ願フ回答

○

某裁判所長

苗字官名殿

○○

某裁判所長

苗字官名

何<sup>府</sup>管轄住所身分氏名ヨリ何<sup>府</sup>管下住所身分氏名へ掛リ何々訴出御取糺之上原告人并代書人へ訴状相副差回サレ可然  
裁判可致旨御掛合之趣致兼知被告呼出シ審問中別紙済口券ノ通解訟願出候間則聞届帰邑申付候依之此段及御回報候也

年月日

第十八号

審判中罪科発露シ断獄廻シノ片添書

原告人 住所身分 氏名

被告人 住所身分 氏名

右何々訴訟審判中原告人氏名別紙尅号之通何々申立被告人氏名二号ノ通何々申答候因テハ何々ノ罪状判然候ニ付訴状  
并答旨相副当人共差廻候條可然御處断有之度候也

年月日

断獄課

御中

聴訟課

第十九号

訴訟ニ關係ナキ微罪発露シ断獄回シノ片通送録ヘ記載方

判事小印 監倉入式ハ  
宿扣入平

住所身分

氏名

右之者 ハ不參致ス式ハ并何  
ハ何々犯則 ニ付始末書 々証書 相廻候也

但シ 証書書類引上ケ置キ公券下  
付シ有之片ハ其交ラ記載ス

年月日 掛り解部小印

第二十号

訟庭ニ於テ犯罪発露ニ付入獄并ニ一時拘留ノ者保管人名録ヘ記載方

判事小印

住所身分

監倉掛小印 氏名

右之者本日 差留或ハ  
入獄申付 候事

年月日 掛解部小印

判事小印

右之者本日差免候事

年月日 掛解部小印

第二十一号

審判中証書類引揚ケ之節下付スル預リ公券

記

苗字何解部掛リ

一証文

但住所身分氏名ヨリ住所身分氏名宛

一何々帳

右者取調中留置候追テ用済此書付引換可下渡モノ也

年月日

何通

何冊

住所身分

監倉掛小印 氏名

某裁判所印

住所身分

氏名エ

第二十二号

不正証書ヲ引揚ケ断獄廻シノ片添書

住所身分氏名

右住所身分氏名へ<sup>掛ル或ハ掛リ</sup>何々訴審判之上証書何通不正之始末別紙<sup>或ハ口書</sup>之通申立候則証書何通引揚ケ本人共差廻候間可然御處断有之度候也

年月日

聴訟課

断獄課

御中

追伸 本文証書引揚候節証券下ケ渡シ置候間落着ノ際御取揚ケ被下度候也

第二十三号

証書不正ト決シ答書差下ケル片ノ受書

○ 年月日

○○

答書御下ケ渡御受書

住所身分

番号

被告人 氏 名

住所身分

答書御下ケ渡受書

<sup>被告人或ハ  
被告代言人</sup> 氏 名

右住所身分氏名ヨリ掛ル何々訴ノ答書差上候處對決之上証書何々ニ付原告人ヨリ訴訟入費相償訴狀御下ケ奉願候ニ付



答書御下ケ渡シ相成正ニ奉受取候依之御請書差上申處如件

年月日

氏 名印

住所身分

代唇人 氏 名印

某御裁判所長

苗字官名殿

第二十四号

審判中原被両告ノ内逃亡等之片検事課へ掛合書

住所身分氏名

右住所身分氏名へ<sup>掛リ或ハヨリ掛ル</sup>何々訴審判中逃亡<sup>或ハ失踪</sup>致シ候旨同村正副戸長ヨリ届出候間失踪搜索ノ上捕縛御差出シ有之度此段申入候也

年月日

聴訟課

検事局

御中

第二十五号

逃亡等ニテ訴状下ケノ片証書へ下ケ書

書面ノ金高或ハ元何拾何円差滯ル旨訴出ルニ付被告氏名呼出状差遣ス處或ハ對決ノ上返済延期ノ對談書差出シ其後同人逃亡致ニ付百八十日相立踪跡不分明之節ハ跡相續人へ掛リ更ニ返済相受申度旨願出則聞届候事

年月日

某裁判所印

第二十六号

呼出ヲ違背シテ出サル片檢事局へ掛合書

住所身分氏名

右住所身分氏名ヨリ掛ル何々訴訟ニ付再度呼出状差遣候處数日罷出不申裁判上差支候間至急引立テ御差出シ相成候様致シ度此段申入候也

年月日

聴訟課

檢事局

御中

(b) 『聴訟庶務之部』

聴訟庶務課順序

一毎朝原告人ニ代書人附添訴所ニ来リ訴状ヲ差出サハ訴状ハ正副本也訴所詰見座之ヲ請取り其大目ヲ請取帳ニ記載シ副本ニ紙

小札ヲ糊貼シ聴訟庶務課ニ送致シ同課於テ受取ル受領ノ印ヲ右受取帳ニ押ス

但シ聴訟庶務断獄庶務トナセトモ本ハ一之庶務課ニシテ支分スルモノハ事務ニ淹滯ナキカ為ナリ

第一條 管主スル簿書十四部左ノ如シ

訴狀請取録 件数増減帳 諸請書編冊 聴訟表 聴訟一件帳 府縣文通録 下訴狀編冊 呼出帳

身代限掲示案綴込 日々署表 件数星帳 済口證文編冊 解訟 日々番号記

第二條 毎日出ル所之新訴ハ訴狀請取録ニ何國何郡何村何番地何之誰被告何國何郡何村何番地何之誰何々訴ト記シ朱ニテ番号ヲ標記シ他管ヨリ来ルハ本文ノ肩ニ何々裁判所ヨリ掛合ト細書ス右請取録ニ記スル所ノ番号ヲ訴狀<sub>正副表</sub>紙左之方原告名前上ニ朱ニ而写載シ然シテ後判事ニ呈ス判事閱了シテ掛了解部ノ主副ヲ先ニ糊貼スル処ノ小札ニ記載シテ再ヒ当課ニ戻ル<sub>附録一號ヨリ第四號迄ヲ見合スヘシ</sub>

第三條 主副ヲ極メ判事ヨリ付スル処之訴狀ハ掛了解部ヘ分付シテ増減件数帳ニ圈印ヲ押シ其中ニ番号ヲ記シ以テ其多寡ヲ知ル一件落着之後之ヲ抹却ス<sub>附録五號六號並ニヲ見合スヘシ</sub>

第四條 掛了解部新訴目安糺畢レハ主副押印シ判事ノ検印ヲ得テ当課ヘ廻シ奥書ノ呼出狀ヲ書シ裁判所ノ印ヲ押シ訴所ヘ廻ス同所於テ原告人ヘ下ケ渡シ請書之ヲ取り請書編冊ニ編ム差日ハ路ノ遠近ニヨリ往来ヲ除キ大率七日トス然レトモ事急ナルハ此限ニ非ス<sub>諸書案ハ附録第七號ヨリ八號並ニ解部署則第一二条ヲ見合スヘシ</sub>

第五條 詞訟一件毎ニ表ヲ為リ番号ヲ朱書シ掛リ主副ヲ記シテ判事ニ呈ス掛了解部ハ各々自ラ為リ其詞訟ノ始末ヲ記シ解訟ノ後朱ニ而点合シ然シテ之ヲ編次シテ聴訟一件帳トナス

第六條 訴狀採用ノ上ハ当課於テ一件袋ヲ拵ヘ原被ノ郡村住居氏名等ヲ記シ其右之方ニ朱ニ而番号ヲ記ス<sub>附録第九號並ニ解部署則第四條ヲ見合スヘシ</sub>

第七條 他管下ヘ渉ル訟ハ掛了解部於テ目安糺済添書ヲ作り判事ノ検印ヲ得テ当課ニ付ス当課於テ浄書イタシ訴狀ハ表紙右ノ方ヘ当裁判所ノ印ヲ捺シ左ノ方原告名前上ニ而番号ヲ朱記シ添書ト共ニ封シ原告人ヘ付シ被告ノ管廳ニ送

ル但シ請書之ヲ取り請旨編冊ニ編ム其訴狀之番号ヲ日々番号記ニ写載シ其下ニ某裁判所廻シト細書是ハ表ニ各裁判所廻シノ目アリ仍テ月末ニ至

表ニ掲クルニ便ナル為也附録第十号十一号ヲ見合スヘシ  
シ解部略則第六号並同略則附録第一号ヲ見合スヘシ

第八條 解訟ノ後被告ノ管廳ヨリ返翰ヲ原告ニ付シ其解訟ノ始末ヲ届ケ出ツ其往復文書ハ諸省府縣文通録ニ編ム但シ

他ヨリ廻シ来ルモ手続前同断ナリ但返翰下ケ渡ス時請旨取之附録  
第十二号十三号ヲ見合スヘシ

第九條 訴狀願下ケ相成分ハ其廉掛リ之解部副本ヘ□採用云々朱唇シ主副押印ノ後判事ノ検印ヲ得テ當課ニ付ス當課  
於テ訴狀下ケ編冊ニ編ム

但正本ハ原告人ヘ下ケ渡シ請旨取之

第十條 前條訴狀願下ケル時ハ下タ方ヨリ差出ス處ノ請書ハ掛リ解部於テ主副ノ押印并判事ノ検印ヲ得テ當課ニ付ス

當課於テ請旨編冊ニ編ム解部略則第八号同付録  
第三号ヲ見合スヘシ

第十一條 駁込訴等有之訴所ヨリ告来ル時ハ當課於テ其本人ノ願旨歟或ハ名前旨歟ヲ取り之ヲ當直ノ解部ニ返ス解部略  
則第九

条ヲ見合  
スヘシ

第十二條 掛リ解部ヨリ臨時呼出スヘキモノハ其郡村姓名並ニ日限ヲ記シ當課ニ付ス之ヲ呼出帳ニ写載シテ差紙ヲ為

リ之ヲ郷宿ニ渡ス但シ審判中ノ者ハ直ニ郷宿ニ達ス機倉預或ハ機倉呼出等附録第十  
四号ヨリ十五号迄ヲ見合スヘシ 解部略則第十一  
条ヲ見合スヘシ

第十三條 差日当日ニ至リ被告人ニ代書人附添訴所へ来リ訴狀ニ添ヘ答旨正副二差出サハ訴所詰見座之ヲ請取當課ニ

付ス當課於テ訴狀之番号ヲ其答旨表紙左之方ニ朱ニ而写載シ一件袋ニ添ヘ掛リ解部ニ分送ス解部略則第十二  
条ヲ見合スヘシ

第十四條 答旨出レハ原被告之住所姓名並掛リ姓ヲ半紙片面ニ記シ上ニ何日席ト記ス之ヲ白洲名前帳ト云其解訟答旨

延期答書ノ類ハ直ニ番号ヲ朱記シ其式前条  
ノ如シ掛リ解部ヘ付付録第十八  
条ヲ見合スヘシ

第十五條 判事初席数件アル時ハ解部ノ位置ニ随テ席順ヲ立テ訴所見坐ニ傳フ解部略則第十五  
条ヲ見合スヘシ

第十六條 裁判狀認メ方ハ掛リ解部ヨリ原案廻リ来レハ西ノ内ニテ原告被告各宅通宛ヲ認メ掛リ解部ヘ返付ス 解部略則第十六條

ヲ見合  
スヘシ

第十七條 経界ノ訟裁許ノ節解部ヨリ繪図面裏唇ノ原案ヲ当課ニ付セハ当課於テ之ヲ認メ解部ニ返付ス 解部略則第十八條ヲ見合スヘシ

第十八條 身代限相成ル節證書裏書等有之時ハ其証唇之写ヲ出サシメ 但用紙美濃 解部ヨリ廻シ来レハ之ニ裏唇之文案ヲ写載

シ当課ニ於テ編綴ス 解部略則第十九條並第二十二條二十四條ヲ見合スヘシ

第十九條 原被告示談ノ上身代限差出候節ハ其趣ヲ書記シ六十日間三ヶ所ニ揭示ス 裁判所門前並ニ本人宅前人通り欄キ場所 揭示案ハ判事検印ノ

上当課ニ付ス当課ニテ浄書致シ張出シ手続取斗フ也揭示案者身代限揭示案綴込ニ綴ル

但裁許身代限申付候モ大署同シ 解部略則第二十條ヲ見合スヘシ

第二十條 前條中右名前ノ者ヘ掛リ訴出ル件ハ同掛リニ付シ他ノ掛リニ分派セサル様注意スヘキ也 解部略則第二十一條ヲ見合スヘシ

第二十一條 本省ヘ伺可相成者ハ解部ヨリ判事ノ検印ヲ得テ原案ヲ当課ニ付セハ当課於テ正副二本ヲ浄書シ正本ニ判

事ノ名印ヲ捺シテ然シテ後郵通ス 解部略則第二十五條ヲ見合スヘシ

第二十二條 預審終審共控告ノ時ハ添書原案ニ主副押印並ニ判事ノ検印ヲ得テ唇類ト共ニ当課ニ付ス当課於テ浄書シ

畢テ書類共ニ封緘シテ掛リ解部ニ返付ス 解部略則第二十六條ヨリ三十一條迄ヲ見合スヘシ

第二十三條 裁判上ヨリ断獄課ヘ廻スヘキ事件ハ掛リ解部ニテ始末書或ハ仮口書並添唇ヲ作り当課ニ付ス当課ニ於テ

通付録ニ其大目ヲ載セ検事局ヲ經テ落着掛ニ送ル

但添書本人名前上ニ入牢歟或ハ宿預歟或ハ宿扣歟ヲ朱ニ而記 解部略則四十三條ヨリ以下ヲ見合スヘシ

第二十四條 詞訟ニ關係ナキ微罪遅不參ノ如キハ解部於テ通送録ニ本犯ノ住所氏名ヲ記シ当課ニ付ス手續前ニ同シ

解部略則第四十四條ヲ見合スヘシ

第二十五條 入獄ノ者有之節ハ解部於テ保管人名帳ニ本犯ノ氏名住所ヲ記シ判事ノ検印ヲ得テ当課ニ付セハ留置ノ証

文ヲ認メ地方囚獄掛リニ付ス解放ノ片モ亦同シ監倉ナシ暫ク如此ス

第二十六條 不正ノ證昏解部於テ引揚相成時ハ当課於テ預リノ公券ヲ認メ掛リ解部へ返付ス其證昏ノ如キハ解部ノ申

聞ニヨリ通付録ニ其目ヲ認メ出納課へ預ケ受領ノ印ヲ取ル解部略則附録第二十号ヲ見合スヘシ

第二十七條 預リ公券下ケ候節ハ請書取之右預リ公券ハ用済ノ上証書ト引換ル手續也

但引揚候證書用済差下ケ候節モ請書取之

第二十八條 訴新済口現在ノ三日ヲ掲ケ日ニ増減ヲ計算シテ日々略表トシ毎朝判事ニ呈ス

第二十九條 各解部ノ兼行スル詞訟件数ヲ計算シテ件数星帳トナシ毎朝判事ニ呈ス

第三十條 解訟之節ハ掛リ解部ヨリ一件侖朱ニテ勾シ済口證文ト共ニ当課ニ付セハ解訟日々番号記ニ其月日并ニ番号

ヲ写載シ其下ニ何々訴ト朱記シ其中段々席前済口或ハ席後済口或ハ願下ケ或ハ裁許或ハ斷獄廻等之目ヲ細書ス

但此時請取録并ニ件数帳ト点合ス済口證文ハ判事並解部主副之小印ヲ得テ編冊ス附録第十九号ヲ見合スヘシ

## 附 録

第一号 訴狀請取録認メ方

何月何日

主  
副

何十何号 何國何郡何番地農商何之誰被告何縣貫屬士族何之誰何々訴

判事ヨリ主副ヲ極当課へ戻ル時掛リ解部姓ヲ記ス

第二号 他管ヨリ廻シ来ル時ノ式

何々裁判所ヨリ掛合

主副  
主副

何十何号 何國何郡何村何番地農何之誰被告何國何郡何村何番地商何之誰何々訴

第三号 解訟相成訴状請取録ヘ点合スル式

主副  
主副

何十何号 何國何郡何村何番地農何之誰被告何國何郡何村何番地農何之誰何々訴

何月何日 席前済口 或ハ断獄廻シ  
同願下ケ 席後済口 或ハ目安紀下ケ

第四号 訴状ヘ番号ヲ記スルノ図

年号月日	
貸金催促之訴	
何年何百何号	
此小札訴所ニ糊貼ス	
判事於テ主副ヲ啓ス	
何郡何村	
何之某	

右小札ハ副本ニ貼ス正本ハ唯番号而已ヲ朱記ス

第五号 増減件数帳

何々解部

(百五号) (同七号) (同八号) (同九号) (同十号)

第六号 落着之後抹却之図

何々解部

(百五) (同八) (同十)

二件済口  
三件現今取調中

—— 法 律 論 叢 ——

第七号 奥書呼出状

如斯訴出條和解否共来ル何日午前第九時代書人差添答書持参可致者也

年号月日

某裁判所印

被告

右村戸長

第八号 奥書呼出状下ヶ渡候節請書案差上申御請書之事



一何國何郡何村何之誰奉申上候私ヨリ何國何郡何村何之誰へ相掛何々之儀奉出訴候処御糺之上来ル何日出之御奥書之御呼出状御下ケ相成正ニ奉請取候然ル上ハ被告村方戸長へ相渡シ拜見書取之期日無遅延罷出着御届可申上候依之御請書差上申処如件

何縣管下

何第大區何小区

何國何郡何村

原告人 農何之誰印

代唇人 何之誰印

年号月日

何裁判所長

某判事殿

第九号 一件俗認メ方

何百何十号

何國何郡何村

何々訴

何國何郡何村

何々判事「此処他管ヨリ来ルハ某裁判所  
何月何日訴ヨリ掛合ト認ム

同 何日答

農原何之誰

商被何之誰

何解部

第十号 訴狀へ押印シ他管へ廻ス式

東京裁 判所印	年号月日
何々訴	
何年何百何十号	

第十一号 添翰渡シ請昏案

差上申御請書之事

一何國何郡何村何番地農商何之誰奉申上候私ヨリ何府縣御管内何國何郡何村何之誰へ相掛候何之訴去ル何日御訴訟奉申上候へハ御糺ノ上右御裁判所或ハ府縣廳へ御差廻相成候ニ付御添翰被下置慥ニ奉請取候然ル上ハ代書人同道来ル幾日出立右御廳へ差上可申候依而御請昏如件

何國何郡何村

何番地農商

原告人 何之誰印

代昏人 何之誰印

新治御裁判所長

某判事殿

第十二号 他管廻解訟ノ後届案

以書付御届奉申上候

一何國何郡何村何番地商農何之誰奉申上候私ヨリ何縣御管下何國何郡何村何之誰相手取り何々訴何月幾日御訴訟奉申上候處御添翰ヲ以テ右御廳へ御差廻シ相成御同所於而訴荅御吟味中一件熟談内済仕済口證文差上候處御聞届相成帰町被 仰付候昨何日罷帰申候依之同御廳ヨリ之御返翰相添候段御届奉申上候以上

年号月日

原告人  
|  
印

代唇人  
|  
印

何々御裁判所長

某判事殿

第十三号 他管ヨリ廻シ来落着之節返翰下ケ渡請唇案

差上申請書之事

一何縣管下何國何郡何村何之誰奉申上候私ヨリ何國何郡何村何之誰相手取り何々裁判所之御添翰ヲ以テ何月何日当御

裁判所へ御差廻ニ相成御審判中右一件熟談行届済口証書差上候處御聞届之上御返翰御下ケ被下慥ニ請取申候然上ハ  
来ル何日出立何々御裁判所へ御届可申上候依之御請辱差上申処如件

年号月日

何々御裁判所長

某判事殿

第十四号

差紙文案

右之者明何日午前第九時代書人同道聴訟課へ差出可申モノ也

年号月日 新治裁判所

原告人

印

代唇人

印

何国何郡何村町

農商何之誰

右村戸長

第十五号

留置人

右之者審判中留置候也

年号月日

新治縣

囚獄掛御中

第十六号

右之モノ明何日午前第九時可被差出候事

御中

第十七号 郷宿呼

何国何郡何村

何之誰

新治裁判所

庶務課

留置人呼出

何月何日呼

一何村何之誰 名前下へ宿主請印ノ上返却ノ事

一同断

第十八号 白洲名前帳

何月何日

一初席

掛リ

姓

何国何郡何村

原 何之誰

何国何郡何村

被 何之誰

右双方代唇人

第十九号 解訟日ノ番号記

何月

掛リ何ノ解部

二日 何百何号

席前済口

何ノ訴

四日 何拾何号

席後済口

貸金訴

七日 何号

他管廻

賣掛訴

九日	何拾何号	他管済口	右同断
十日	何号	目安糺下ケ	品代金訴
十二日	何号	断獄廻	貸金訴
十五日	何号	願下ケ	小作米訴

### 訴訟口詰并見坐職務順序

凡ソ當職ノ務タル毎朝訴訟口ニ詰下ヨリ出ス処ノ昏状ヲ送致シ且ツ訟庭内原被告人ノ動作進退ヲ監視シ其他解部屬ノ指揮ニ因ル其職務順次ヲ追テケ條ヲアクル左ノ如シ

### 第一條

毎朝午前第八時ヨリ十二時迄ヲ限り原告人ニ代書人附添ヒ訴訟口ニ来リ訴状<sup>但シ正通ヲ呈スレハ</sup>當職之ヲ受取リ其昏式ヲ閱シ原被告人ノ住所身分氏名且ツ訴状ノ大目ヲ訴状受取簿ニ謄記シ即時庶務課ヘ送致シ受付掛リノ小印ヲ受ク但シ原告人他管轄ニシテ其裁判所ノ添翰ヲ奉シ来リ呈スレハ則チ本人ノ住所身分氏名且ツ其添翰ヲ呈スル由ヲ訴状受取簿ニ記載シ庶務課ヘ送致ス

### 第二條

掛リ解部訟庭ニ臨ミ訴状目安ヲ糺ス時ハ見坐一人訟庭ニ出テ原告人ノ氏名ヲ喚ヒ解部ニ正面シ柵ニ倚ツテ立シメ代書人ヲシテ後ヘニ附添ハシム且ツ目安糺シ済ミ其訴状ニ奥昏ノ喚出状ヲ認メ庶務課ヨリ當職ニ付ス當職於テ之ヲ原告人ニ下付シ受昏之ヲ取リ即時庶務課ヘ送致ス

但シ被告人他管轄ナレハ則チ添翰ヲ付與ス其順序モ亦本條ニ準ス

## 第三條

奥昼日限午前第八時被告人ニ代昼人付添ヒ訴訟口ニ来リ奥昼并答昼<sup>但シ正副ニ通</sup>且ツ代昼人氏名届昼ヲ呈ス当職於テ之ヲ受取リ其書式ヲ閲シ庶務課へ送致ス

## 第四條

判事席ニ臨ムノ日原被告人ノ名及ヒ掛解部ノ姓ヲ記シ庶務課ヨリ當職ニ付ス當職於テ白洲喚出帳ニ写記シ下ヨリ差出ス処ノ名前昼ニ照知シ原被出頭ノ旨ヲ掛解部ニ告ク而メ後判事訟庭ニ臨メハ見坐二人訟庭ノ左右ニ出テ原被告人ノ氏名ヲ喚ヒ調席ニ正面シ柵ニ倚ツテ並立セシメ代書人ヲシテ後ヘニ附添ハシム然シテ其動作進退不敬ナキヲ監視ス但シ原被告人ヨリ差出ス処ノ証拠昼類ハ見坐之ヲ受取り掛解部へ送致ス

## 第五條

對談昼且ツ濟口昼ノ類原被告人ヨリ呈スレハ則チ當職之ヲ受取り概チ其昼式ヲ閲シ掛解部へ送致ス

## 第六條

一件落着ノ後原告人他管轄ナレハ<sup>第二條但昼ノ類</sup>則チ庶務課ニテ返翰ヲ認メ當職ニ付ス當職原告人ニ下付ス受書之ヲ取り庶務課へ送致ス

## 第七條

管内ノ人民他管ノ人民ヲ訴ル時ハ第二條但書ノ如シ一件落着ノ後返翰ヲ受ケ来リ呈スレハ其末由ノ届昼ヲ差出サシム<sup>其文例ハ庶務課順序ニ掲ク</sup>當職之ヲ受取り第二條但書ニ準シ訴狀受取簿ニ記載シ庶務課へ送致ス

## 第八條

訴狀趣意不條理ニメ採用成ラサル者訴狀願下ノ書面ヲ呈スレハ則チ當職之ヲ受取り掛解部へ送致ス當職解部ノ差図ヲ



受ケ受書之ヲ取り訴状ヲ下遣ス受辱ハ即時庶務課へ送致ス

#### 第九條

差紙喚状ハ庶務課ニテ認メ當職ニ付ス當職本日當番ノ郷宿ニ下遣シ受印帳へ受印セシメ即時飛使ヲ發セシム

但シ喚出シ日限本人訴訟口ニ来リ名刺ヲ呈シ差紙ヲ返上ス當職之ヲ受取り庶務課へ送致ス

#### 第十條

喚出シヲ受ク原被告人ニハ毎朝午前第八時代書人附添ヒ訴訟口ニ来リ住所氏名ヲ一紙ニ記シ之ヲ呈ス當職之ヲ受取り掛解部へ送致ス然ル後解部訟庭ニ臨ム

但シ原被告人出頭ノ後猥リニ訟庭外へ出ルヲ禁ス

#### 第十一條

原被告人ノ内宿預ケ相成ル節ハ掛解部ヨリ本日當番ノ郷宿へ申シ付ル當職右解部之差図ヲ受ケ宿主ヨリ受書之ヲ取り本人ヲ下遣ス受書ハ即時庶務課へ送致ス

#### 第十二條

原被告人等ヲ喚出ス時ハ庶務課ニテ住所氏名ヲ喚出帳ニ記シ當職ニ付ス當職本日當番ノ郷宿ニ下遣シ本人ノ宿主ヨリ受印ヲ取ル預ケ人等喚出スモ手続前同断ナリ

但シ預人出頭セハ必ラス宿主ヲシテ附添ハシム

#### 第十三條

原被告人ノ内犯罪発露或ハ一時拘留申シ付ラル時ハ見坐解部ノ差図ヲ受ケ本人ノ所持品ヲ改メ封印シ本日當番ノ郷宿ニ之ヲ預ケ即チ受辱ヲ取り然ル後鍵繩ヲ以テ本人ヲ縛シ囚獄掛ニ渡ス

但シ受辱ハ即時庶務課へ送致ス且ツ入獄証文ハ庶務課ヨリ囚獄掛へ付ス

#### 第十四條

入獄ノ者事件落着シ出獄申シ付ラル、時ハ囚獄掛護送シテ訟庭口ニ来ル見坐之ヲ受取り掛解部へ申シ出ル然ル後解部訟庭ニ臨ミ出獄ノ趣申シ渡シ見坐ヲシテ縛ヲ解カシム而メ見坐立合郷宿ヲシテ預品物ヲ本人ニ渡サシム即チ本人ヨリ受辱之ヲ取り庶務課へ送致ス

但シ出獄証文ハ庶務課ヨリ囚獄掛へ付ス

#### 第十五條

囚人并懲役人等他ノ事件ニ関係スル者引合セ訊問セラル、時ハ囚獄掛護送シテ訟庭口ニ来ル見坐之ヲ受取り掛解部ニ申シ出ル然ル後解部訟庭ニ臨メハ見坐一人訟庭ニ出テ本人但シ囚人ハ両手ノ縛ヲ解クヲシテ原被告人ニ並ヒ立シメ之ヲ監視ス訊問終レハ見坐解部ノ差図ヲ受ケ囚獄掛ニ渡ス

但シ事柄ニヨリ原被告人等ヨリ示談ノ儀申シ出ル時ハ見坐解部ノ差図ヲ受ケ訟庭内ニ於テ談セシム

#### 『庶務之部』

##### 庶務課假順序

諸省府縣ヨリ之往復其他廳中一切之文書總テ當課ヲ經由セサルハナシ其手續順序左ノ如シ

第一條 管主スル處之簿書廿五部左ノ如シ

本省伺録	本省達録	本省文通録	府縣文通録	回達録	布告刻紙編冊	太政官布達編冊
太政官日誌	司法省日誌	通付録	勤怠録	日誌	諸願伺届編冊	履歴編冊
						同短冊簿

職員録 喚出帳 病囚録 同人名帳 書籍目録 請書編冊 官書貸渡帳 黜陟并発着録

新治縣文通録 検事局文通録

第二條 本省へ伺指令ヲ受へキ者ハ正副二通ヲ淨写シ正本ハ判事ノ押印アリ之ヲ送進ス其原案ヲ編録シ本省伺録トス指令ノ後朱文ヲ写入ス本紙ハ専用スル課ニ送致ス

但請取書ヲ本省録局へ宛出ス附録一ノ号ヲ見合スヘシ

第三條 本省刻紙達書

但刻紙ニ非ル分ハ写一葉ヲ検査局ニ送付ス本紙ハ判吏ニ呈シ閱了之後各課周覽ニ入レ各員兼知之印ヲ取り本省達書録ニ編ス

第四條 太政官布告編冊

第五條 同布達編冊

第六條 太政官日誌編冊

第七條 司法省日誌編冊

右第三條ヨリ第七條ニ至リ一通宛三課ニ分賦シ其一ハ当課ニテ編録ス回覽之如キハ第三條但書之如シ

第八條 諸省ヨリ之達書ハ回達録ニ編ス

但其手續ハ第三條但書ニ仍ル

第九條 本省ヨリ之文通ハ判事ニ呈シ閱了之後本省文通録ニ編ス

第十條 府縣へ掛合書之如キハ掛リ之員其原案ニ小印ヲ据へ判吏ニ呈シ檢印ヲ得テ当課ニ付ス当課於テ淨書シ送發ス其回答之如キハ掛リ之員ニ付シ判事閱了ノ上當課ニ戻レハ編録ス

第十一條 諸文通其他之書類ヲ受付通送スルニ總テ其事目ヲ通付録ニ登記シ主務課ニ送り受領之印ヲ取ル

但通付録ヲ分テ甲乙之ニツトス甲ハ廳中通付之書目ヲ記載シ乙ハ府縣ニ往復スル文書ノ目ヲ記シ搜索ニ便ス淨書之後原案ヲ掛リ員ニ返ス時ニ通付録ニ其印ヲ取り落着之後往復之順序ヲ立テ編冊ス

第十二條 毎月勤怠録甲乙二冊ヲ造ル 甲ハ判支ヨリ等外ニ止リ乙ハ給仕ヨリ小遣ニ止ム 毎朝各員出之印ヲ押ス其出勤退廳ハ明治六年十一月十四日史

官達ニ依ル十時ヲ過ル遅参トス甲乙分ハ翌月本省ニ送進ス乙之分ハ直ニ出納課ニ付ス

但十時ニ至レハ当課ニ而勤怠録收取メ不参之員ヲ取調フ 付録二号ヲ見合スヘシ

第十三條 府縣文通之大目并各員不参其他廳中一切之事故ヲ日誌ニ請求シ脱漏ナカラシム

第十四條 裁判所挙用之人アレハ先其管轄廳ヘ文通シ差支之有無ヲ問ヒ然ル後ニ挙用ス任ヲ解ハ其旨ヲ其管廳ニ通達ス

但差掛リ候分ハ挙用之後管廳ニ其旨通達ス 附録三号ヲ見合スヘシ

第十五條 新任ハ履歷紙并短冊各三葉請書二葉ヲ徵取ス各一葉ヲ各簿ニ編シ其余ハ皆本省ニ送達ス

但昇等轉免共請書二葉ヲ徵取シ其一ハ本省ニ送進ス其人名ハ黜陟録ニ記シ出納課ニ示ス 附録四号ヲ見合スヘシ

第十六條 免職アレハ奉職年月ヲ計算シ滿一年以上ナレハ御規則ニ准シ其高ヲ取調ヘ判支ニ呈シ検印ヲ受ケ出納課ニ

達ス次ニ本日出頭之者 本人或ハ名代人ヘ当課於テ書付下ケ渡シ出納課ヘ廻ルヘキ旨口達ス 附録五号ヲ見合スヘシ

第十七條 本省ヨリ在勤相成者ハ出勤之上届書ヲ本人ヨリ徵取シ本省ヘ廻ス履歷紙一葉ヲ徵取スル新任ノ如シ 附録六号ヲ見合スヘシ

合ス  
ヘシ

第十八條 帰京或ハ他ヘ出張被命候者ハ詞令達之上請書二葉ヲ徵取シ其一本省ヘ送致ス出立ノ砌ハ其届書ヲ徵取ス

附録七号ヲ  
見合スヘシ

但帰京出立ノ届書ハ一葉其余ハ都テ二葉

第十九條 黜陟轉任等隨時之ヲ記シテ職員録トス

但名刺差札帳ニ仕立置免職帰京等之節ハ抜テ之ヲ其帖ノ尾ニ付ス其書例之如キハ明治六年二月十二日史官達ニ仍  
ル

第二十條 黜陟轉免御用出発着共記簿シテ出納課ニ報知ス

第二十一條 祭日祝日等之休暇并臨時休暇アルモ前以テ判事ニ申告シ諸課へ通達ス且腰掛張出シ等之取計アリ

但紀元新年天長ノ賀判吏以下奉賀表アリ書式ハ壬申三百四十七号ニ依ル但訴訟案件録ハ  
号ヲ見合スヘシ

第二十二條 諸願伺届式

諸願伺ハ美濃紙ニテ 三枚

諸届ハ同断 二枚

所労届ハ半紙ニテ 一枚

第二十三條 本省始メ其他諸省府縣へ掛合並回答之文書郵便ニ付スヘキ分ハ總テ封緘之上通付録ニ記シ出納課ニ付ス

第二十四條 宿直割付之際ニ至リ所労病氣之者有之時ハ当課ヨリ其日限ヲ申通シ差支之由回答有之時ハ次ノ番ニ回ス

各員兼知小印済之後ハ当課之關係ニ非ス

但免職帰京御用出等ハ此限ニ非ス

第二十五條 投訴張訴等有之節ハ採用不致旨ニ通ヲ認メ一ツハ裁判所門前一ハ人行多キ場所ニ揭示ス付録九号ヲ  
見合スヘシ

追録一号

奏任官進退伺ハ史官宛ニテ差出御指令之後請書ハ司法卿宛ニテ差出申候同上任叙之節ハ式部宛ニテ請書差出ス書式付  
録十号

ヲ見合  
スヘシ

第二号 判任并等外親病氣自身病氣等ニ而看病願或ハ他行養生願等差出候ハ、  
六年三月卅一日四月十四日本省達 付録十一号ヲ  
七年二月廿五日録局文通ニ依ル 見合スヘシ  
第三号 逮部課付屬之者懸隔之地ニ派出致シ居候者任解其地ヘ達候儀 付録十二号記録  
課文通ニ依ル

附 録

一号 本省伺御指令濟請取案

記

一何國何郡何村何之誰處刑伺御指令濟

一何々刑律伺御指令濟

合何通

右正ニ落手致シ候也

年月日

新治裁判所

庶務課

本省記録課御中

二号 勤怠録差廻之節案

記

一何月分勤怠録

沓冊

右御廻シ申候也

年月日

本省記録課御中

新治裁判所

庶務課

三号 挙用ノ人有之節其管廳へ掛合文案

御縣貫属士族

何ノ誰

御管下

何國何郡何<sub>町</sub>

農商何ノ誰

右之者当裁判所へ登用致シ度御差支モ無之候ハ、来ル<sub>或ハ</sub>何日午前第十時禮服着用当裁判所へ出頭候様御達有之度此段及御掛合候也

年月日

新治裁判所

何縣御中

其二

肩書

名前

右之者當裁判所へ登庸致シ度御差支之儀モ無之哉及御打合候間否至急御回報有之度此段申入候也

年月日

御中

其三

已ニ登庸ノ後管廳ヘノ掛合文

肩書

名前

右之者当裁判所等外吏ニ登庸致シ候右ハ兼而御打合之上可取計處支務多端ノ際殊ニ遠路懸隔無其儀前條取計候間右之段御兼知有之度此段御断旁申進候也

年月日

新治裁判所

何縣御中

任ヲ解候節通達文案

肩書

名前

右之者儀先般御掛合之上当裁判所ヘ登用致シ置候處今般職務差免候間御兼知迄此段申入候也

年月日

新治裁判所

何縣御中

四号 任解届式



月日

一任 何々解部

月日

一任 何屬

右之通本日詞令相達候間別紙請書相添此段御届申候也

年月日

本省大少亟御中

新任届式

御届

月日

一補 何等出仕

何縣管下

國郡村農  
商

氏名

年号月日生

何縣貫属土族

氏名

年号月日生

月日

一補 何等出仕

右之通本日相達候條別紙請書一枚履歷紙并明細短冊共二通宛相添此段届申候也

何官 氏名

何官 氏名

新治裁判所在勤

何判事 姓名

年月日

本省大少丞御中

御届

月日

一免本官

月日

一職務差免

右之通本日相達候間請書相添此段御届申候也

年月日

本省大少丞御中

新治裁判所在勤

何々判事 姓名

官 姓名

等外何等姓名

新治裁判所在勤

何判事 姓名

五号 官員免職後勤續取調判事へ伺案

判事

何年何月何日拜命  
同日免職

右勤續取調候處滿何年以上ニ付御規則之通月給何ヶ月分下賜度候也

年号月日

庶務課掛リ小印

何ノ誰

(欄外書入)

「七年四月十日記録課へ問合

辞令式

満何ヶ年以上勤續之廉ヲ以月給何ヶ月分下賜候事

明治貳年何月何日

司法省

六号 在勤之地ヨリ本省へ届

私儀

何月何日何々表へ着何日ヨリ出勤仕候此段御届申候以上

年月日

官 姓 名

添書案

官姓名儀当地着出勤之上別紙之通届出候間即相添此段申入候也

新治裁判所在勤

年月日

何判事 氏 名

本省大少亟御中

苗 字 名

七号 在勤ノ地ヨリ又他へ在勤相成節届案御届

月日

一何裁判所在勤

右之通本日詞令相達候間別紙請書相添此段御届申候也

年月日

本省大少亟御中

帰京御届

月日

一帰京申付

右之通以下同文

御中

出立届差出候節本省へ届添書按

当裁判所在勤官姓名儀何地在勤相達置候處別紙之通来ル何日出立之段届出候間即相添此段申入候也

官 姓 名

新治裁判所在勤

何判事 氏 名

官 姓 名

八号 本省へ賀表差廻候節添書案

別紙之通 新年天皇節  
紀元節 賀表差廻候間可然御執奏有之度此段申入候也

御中

御中

九号 張訴投訴揭示案

昨何日 当裁判門前 或ハ門扉ニ無名ノ投訴或ハ何郡  
所願誰ト認候張訴 有之右ハ可願出筋ニ候ハ、訴訟口へ可申立處無其儀ニ付採用不致者也

年月日

新治裁判所

十号

追録

別紙位記式部寮ヨリ御回相成候條御拜命相成候得ハ早々請書御差出可有之此段申添候也

六年六月廿五日

大少亟

三島権少判事殿

本月廿五日付ヲ以位記御回シ相成即拜命御請書二葉差出此段及御荅候也

六年六月廿七日

本省大少亟御中

新治裁判所

權少判吏 三島 毅

私 儀

本月廿五日被叙 正七位謹而御請申上候以上

明治六年六月廿七日

式部寮御中

權少判吏 三島 毅

私儀進退之儀別紙之通奉伺度依之正副二通相添御回シ申候間可然御執奏有之度此段申入候也

新治裁判所在勤

六年十二月十三日

本省大少亟御中

權少判吏 三島 毅

私儀進退之儀奉伺候處今般御指令濟御回シ相成正ニ落手仕即請書二通差出候間可然御執奏有之度此段申進候也

新治裁判所在勤

六年十二月十日

大木司法卿殿

權少判吏 三島 毅

用紙美濃ニ而二タ通

私儀

本年七月廿三日附ヲ以進退之儀奉伺候處今般御處断朱書ヲ以御下ケ相成正ニ落手仕依之御請申上候也

新治裁判所

明治六年十二月十日

権少判吏 三島 毅

大木司法卿殿

十一号

各裁判所出張在勤之官員親病氣自身病氣等ニ而帰省看病願或ハ他行養生等願出候節ハ情実取糺之上此迄聞届其旨届出相成居候處父母危篤等ニテ時日遷延候而者親子ノ至情難忍之類ハ不得止其所長ニ而日數三十日迄ハ御暇聞届置其都度々々御届可有之候湯治願等總テ他方<sup>(マコ)</sup>へ罷越養生願杯之儀ハ其情実ニ寄り可聞届儀ニモ候得共右之類願出候者有之節ハ篤卜情実御取糺之上不得止儀ニ候得ハ容牀書取添一應御伺出可有之此段兼而及御達候也

六年三月三十一日

本省大少丞

河口七等出仕殿

官員帰省并湯治御暇願等今般別紙之通り御達相成候ニ付御廻申入候湯治等總テ於他行養生願之儀ハ去ル三月卅一日付ヲ以御達申入置候通相心得御取計有之度此段申添候也

明治六年四月十四日

大少丞

## 河口權少判事殿

官員帰省御暇日数之儀往来ヲ除キ三十日御聞届相成候筈ニ付諸省使府縣ニ於テモ同様可取計且湯治御暇等之儀モ右ニ准シ候條此段為心得相達候也

但病氣其外無據事故有之向ハ日延之儀追願為致更ニ三十日間差許不苦候夏

明治六年四月十四日

正 院

等外吏并逮部課付属共帰省且墓参等願出候節本省伺ヲ經ル哉又ハ所長ニ而聞届其旨御届可申哉否御問合致兼知候父母病氣之節ハ帰省御聞届相成候上其段御届有之可然存候墓参等ノ為ニ帰縣等ハ容易ニ御聞届難相成夏ニ有之候間若願出候者有之候節ハ御伺相成候筋ト存候此段御回答申進候也

七年二月廿五日

本省記録課

新治裁判所庶務課御中

十二号

去年十月七日付ヲ以御達有之候逮部課付属之者任解共裁判所長ニ而詞令相達候様御達有之然ル處於其土地任用致シ候而モ十里或ハ廿里之遠キヲ隔候ヲ喚立候而モ旅費等ハ不賜儀ニ候間右ハ詞令其檢職出張所へ差回達之上請書取之差回候様取計候而可然哉又ハ当裁判所へ喚寄候筋ニ候哉此段及御問合候間至急御報有之度候也

新治裁判所



七年一月廿八日

庶務課

記録課御中

本文詞令渡方之儀ハ所長ニテ相渡シ趣意不違候ハ、便宜ニ任セ不苦儀ト存候間此段及御答候也

一月三十一日

記録課

(c) 『断獄並落着之部』

検事局ヨリ犯罪人ヲ送致スレハ則先落着掛ニ於テ其郡村姓名并番号ヲ犯罪人受付録ニ登記見坐ヲシテ假ニ之ヲ請取ラシメ而シテ其具狀調辱ヲ当直解部ニ付シ繫獄或ハ保管ノ見分ヲ経訴所ニ於テ之ヲ言達シ繫獄ノ者ハ囚獄護送人ニ引致シ保管ノ者ハ保責照管者ニ責付シ權倉ナシ故ニ暫ク此ノ如クス然ル後ニ之ヲ判事ニ進呈ス若シ其訴所ヘ掛リ吟味願等ノ者アル時ハ則同所ヨリ直チニ検事局ヘ付シ而シテ後其通傳順席亦猶前ノ如キナリ翌日判事其辱類ヘ主副ヲ定メ落着掛ヨリ其書類ヲ一件袋ニ納メ兼行解部ニ配付シ表一葉ヲ作り断獄表ニ編ム然リ而シテ又一夜ヲ間テ判事初席スト雖モ若事ノ急卒ニ係ル者ハ即時推問セサルヲ得ス然後兼行解部節次審問シ罪人罪ニ服スレハ則草案ヲ作り正ヲ判事ニ受ケ属淨辱シ風繁劇ニ付協議ノ上上当分ノ解部淨辱ス解部検事之印ヲ取り逐條異同有無ナク論定テ而シテ之ヲ読聞カシメ違背スル所ナクンハ則チ表一葉ヲ作り一件袋ニ納メ俱ニ落着掛ニ交付ス落着掛見坐ニ打合セ其順序ヲ立テ判事席ニ臨ミ当直解部陪坐シ証辱或ハ拇印ヲ取り而シテ断刑掛ニ送り擬律成ラハ則チ落着掛ニ於テ罰文ヲ淨辱シ二通淨辱シ刑名宣告ノ後一ヲ村役人ニ下付シ一ヲ地方廳ニ送致ス赃物ヲ調査シ落着ノ日ヲ議定シ引合ヒ人ヲ呼出シ此ニ於テ判事復席ニ臨ミ檢事連班当直解部陪坐シ見坐二人左右ニ立チ処断人員ヲ呼ヒ込ミ而シテ判事罰文ヲ言渡シ囚獄掛ニ付シ決放ス若シ收贖々罪金ノ言渡シナレハ五日ノ内之ヲ納メシムル也

## 落着掛主務

第一條 管主スル簿唇十七部左ノ如シ

犯罪人受付録 繫獄人名帳 保管人名帖 通附録 保管請唇編冊 断獄表 断獄日々表

断獄件数帖 贓物預帖 証印名前帖 府縣文通録 落着呼出帳 罪科期限録 品物請唇編冊

贖金収納帖 没官帖 行刑表

第二條 繫獄或ハ保管等ヲ言達シ畢レハ則チ證唇ヲ囚獄護送人ニ渡シ請唇ヲ保責照管者ヨリ取り其郡村姓名并ニ年月日ヲ繫獄保管人名帖ニ登記シ而シテ落着ノ節亦之ヲ殊消ス

但シ請唇ハ保管請唇編冊ニ編ム

第三條 一件袋ハ犯罪人ノ郡村姓名ヨリ罪名兼行主副ノ姓名ヲ載セ傍ラニ番号年月日并ニ検事局何府縣廻リ且検事局掛リ

苗字ヲ記シ兼行解部ニ配付ス

第四條 断獄日々ノ新授決放現在之件数保管檻倉繫獄ノ人員ヲ計算唇記シ之ヲ断獄日々表トナシ毎朝判事ニ進ス

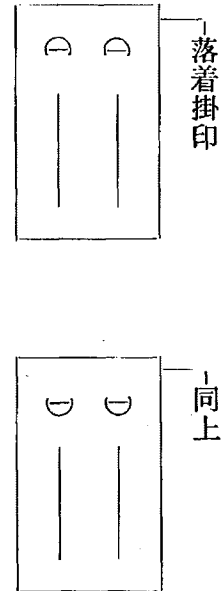
第五條 各解部兼行件数ノ多寡ヲ計算點圈シ之ヲ断獄帖トナシ毎朝判事ニ進ス

第六條 犯罪人贓物アル片ハ贓物預帖ニ登記シ贓贖掛ニ預ケ置キ受領ノ印ヲ取り而シテ下付ノ節ハ又ハ消印ス

第七條 兼行解部罪案讀聞ケノ後其郡村姓名ヲ証印帳ニ記シ見坐ニ付ス

第八條 買取リ質取り又ハ預リ置ク盜贓品ヲ取上ル節ハ上納唇ニ通ヲ添ヘ差出サシメ左図ノ如ク割印シ甲印ハ兼行解部ニ送致シ乙印ハ本人ニ下付シ而シテ其贓品ハ第六條ノ通取扱ヘシ

但現在品無之代金ニテ上納スヘキ者モ同様タルヘシ



第九條 吟味ノ上判事席ニ於テ入獄申付ラレ候者見坐其囚ノ所持品取調ヘ引送ルルハ品書相添ヘ之ヲ受取り是亦第六條之通取扱ヘシ

第十條 強窃盜未決中現在品評價ノ上落着マテ事主ヘ仮預ケ致スルハ諸昏之ヲ取り贓物預帖ニ何月幾日預ケ置ク旨ヲ殊昏ス

第十一條 諸省府縣ヨリ断獄ニ関係スル往復ノ文昏庶務課ヨリ判事ノ一覽ヲ經通附録ニ登記シ兼行解部ニ付スト雖モ若シ其一件ニ相立ツ可キ者ハ乃チ之ヲ受ケ順序通付シ落着之後文通録ニ編ム

第十二條 犯罪人疾病アリ地方ヨリ医員ノ診状ヲ傳達スレハ庶務課ニ於テ兼行解部一覽ヲ經ル後チ病囚録ニ編ム若シ病死スレハ則チ其因ヲ簿昏ニ記載シ遺骸ハ親族請フ者アレハ下付ス

第十三條 現在ノ盜品并ニ費用ス物品等兼行解部ヨリ評價ノ儀打合セアレハ則チ前日評價人ニ達シ翌朝估計セシメ月末ニ至リ其出勤時日ヲ合算シ出納ニ通達ス

第十四條 犯罪人病症検査ノ為メ医員ヲ呼出スアラハ則チ呼出状ニテ之ヲ病院ニ達シ出頭診察ノ後其姓名并兼行解部何某ト昏記シ之ヲ出納課ニ通達ス

第十五條 決放ノ節引合ヒ人ヲ呼出スルハ落着呼出帖ニ其因由綱目ヲ記シ差紙ヲ郷宿当番ニ付与ス

第十六條 懲役五年以上ノ処刑ナレハ則チ必ス前日地方廳ニ掛合且ツ笞杖罪ト雖モ宿村送ヲ以テ他管ヘ引渡ス者前同

様通達ニ及フヘシ

但シ懲役<sup>(マツ)</sup>十日ヨリ三年ニ至ルノ者懲役掛ヘ掛合ヘシ

第十七條 犯人ノ罪科ヲ罪科期限録ニ記ス然リ而シテ地方廳ヨリ満期中病死等ノ通達アルハ亦之ヲ殊辱ス

第十八條 五日ノ内収贖々罪金ヲ納メ来レハ則チ贖金收納帖ニ記シ贓贖掛ニ付致シ受領ノ印ヲ取り受取証辱ヲ納人ニ下付ス

第十九條 不正金或ハ不正物品ハ没官帖ニ登記シ第十八條ノ通取扱ヘシ

第二十條 事主ニ物品并ニ品代金ヲ追還スルハ必ス本人ヲ喚出シ下付シ請辱之ヲ取り品物請辱編冊ハ編ム若シ犯人費用シ追還スル者之レナキハ判事ヨリ戸長ニ申付ケ損失ト心得ヘキ旨通達セシメ猶請辱之ヲ取ル

第二十一條 進退伺辱差出ス者アルハ庶務課ヨリ判事ノ檢閱ヲ經テ断刑掛ニ送り擬律成テ而シテ後チ之ヲ受取り其餘日ニ罰文ヲ殊辱シ本人ヲ喚出シ応接間ニ於テ下付シ請辱之ヲ取ル

第二十二條 決放ノ後簿辱ノ記載畢レハ則チ罪案ハ断刑掛ニ表一葉ハ兼行解部ニ付致ス

第二十三條 行刑表ハ月末ニ至リ行刑ノ人員ヲ取調表ノ名目ニ填辱ス

## 追録

第一條 差紙ハ掛リ解部ヨリ某郡村姓名ヲ記シ庶務課ニ付ス同課於テ呼出帳ニ鄉村姓名等ヲ記載シ差紙ヲ認メ上ニ番号ヲ朱書シ 解部ノ位置ニヨリ上一号ヨリ起リテ次第スルナリ之ヲ訴所詰ヘ付ス其差日ニ当ルヤ各村姓名辱ヲ以テ着ヲ訴フ 之ヲ差出シト云フ訴所之ヲ庶務課ニ送ル同課於テ呼出帳ニ仍テ姓名ヲ照知シ掛リ解部ニ分送ス

但宿預ケ入牢人呼出シモ亦手續前同断也

第二條 囚人病氣或ハ牢死等之事地方廳ヨリ届アラハ判事并掛リ解部一覽ヲ遂ケ病囚録ニ編ム其人名ハ病囚人名簿ニ記載ス

第三條 病囚休養之義同断届アラハ手続前條ノ如シ  
但シ牢死ハ落着掛一覽ノ後病囚録ニ編ム

出入獄證書案

入獄

年月日

新治縣囚獄掛御中

新治縣へ掛合ノ文案

何府管下何國何郡何村

何之誰

新治裁判所庶務課印

何國無籍

何之誰

右ノ者犯罪ニ付<sup>明何日</sup>決放ノ上御縣へ御引渡シ申度此段及御掛合候也

年月日

新治裁判所

新治縣御中

何縣管下何國何郡何村

何之誰

右ノ者<sup>明何日</sup>決放ノ上宿村送リヲ以テ本貫ヘ引渡シ度即別紙本貫回答并始末并相添此段申入候也

年月日

新治裁判所

新治縣御中

再伸 別紙并類ハ御一覽濟御返却有之度候也

或ハ

囚人

何名

右ハ犯罪ニ付<sup>明何日</sup>懲役<sup>五年七月或</sup>可申付間例ノ通り御用意有之度此段前以テ申入置候也

年月日

新治裁判所

新治縣御中

懲役一十日ヨリ三年ニ至ル者直ニ懲役掛ヘ掛合ノ文案

犯罪ノ者

何名

右者明何日懲役<sup>何日</sup>可申付間例之通午前第九時護送ノ者御差出有之度候也

年月日

新治裁判所

庶務課

新治縣懲役掛御中

懲役証書案

何國何郡  
商農  
無籍

懲役一年

何之誰

年月日

新治裁判所

庶務課印

新治縣懲役掛御中

或ハ

梟 何名

斬 何名

絞 何名

右者明後何日午前第十時行刑相成候間刑場其他御差固無之様御用意有之度此段及御掛合候也

年月日

新治裁判所

新治縣御中

右各回答ヲ得テ決放ス而シテ死刑ノ者犯由牌ノ都合モ有之ニ付前以テ罰文ヲ送致スヘシ若シ掛合ノ後チ都合ニヨ

リ日限差延候節ハ左ニ

肩唇前文ノ通

右ノ者<sup>本日</sup>決放ノ処都合ニ寄り差延候間此段申入候也

年月日

新治裁判所

新治縣御中

本省へ届案

何<sup>府</sup>縣管下何国何郡何村

梟<sup>斬</sup>紋

何之誰

右ハ兼テ刑律伺済ニ付本日行刑致シ候此段御届申上候以上

新治裁判所在勤

何司法卿殿

刑事何某実印

医員呼出ノ文案

囚人病症検査致シ度間其院中医生之内一人明幾日午前第九時出頭可致候也

年月日

新治裁判所

病院中



戸長請書文案

何府縣管下何国何郡何村

何之誰

右ノ者被盜品ハ費用致スニ付損失ト可心得右之通可申通旨被仰渡兼知奉畏候依テ請旨如件

年月日

右村戸長

何ノ誰印

新治御裁判所長

苗字官殿

待罪人處断済請旨案

趣意可認入

………儀ニ付進退伺旨差出置候處今般右伺旨ニ贖罪金何円御處断朱旨ヲ以テ御下付相成正ニ請取中候然ル上ハ右金五日ノ内上納可致依之御請旨如件

年月日

実印

新治裁判所

何判吏殿

贖金没官物受取証旨案

記

一 不正  
贖罪 收贖金何十何円何十何錢也

右正ニ受取候事

年月日 新治裁判所庶務課印

追録

差紙案

俚ノ認方

新治裁判所

何国何郡何村

何ノ誰納

何郡何村

戸長

何郡何村

何之誰

右之者尋儀有之間明来幾日午前第九時召連可罷出者也

年月日 新治裁判所

庶務  
課印

右村

戸長

郷宿止宿ノ者呼出方

何月何日呼或ハ即刻呼

何郡何村

何号

何之誰

入獄呼出案

何郡何村

何之誰

右ノ者明何日午前第九時可被差出者也

月日

庶務課印

### 断獄課事務署則附録

一断獄課中ニ断刑掛ヲ置ク者ハ事務ノ繁劇ニヨリ設クル所ニシテ則チ判吏ノ手ニ代リ律ヲ擬シ刑ヲ断ス其略則左之如シ

一罪案成リ調印済ミ掛リ解部刑名ヲ罪案欄内ヘ填シタルヲ落着掛ヨリ通付スレハ断刑掛ニテ罪案ヲ調査シ刑名罪案ト差錯ナケレハ律ヲ擬シ罰文ヲ草シ通付録ニ登記シ判事ニ呈ス判事律ニ依テ仍ホ刑名ノ当否ヲ審断シ其当ヲ得レハ姓印ヲ捺シテ断刑掛リニ下付スル事

但シ口供結案ト欄内ニ填スル所ノ刑名符セサルアレハ掛リ解部ヘ一應討論スルヲアルヘシ

一判事ヨリ下付スル罪案罰文ヲ検事ニ交付ス検事披閱シ終テ見留ノ印ヲ罰文ニ捺シ回送スルヲ掛リ解部ノ照知ヲ經テ落着掛リニ通付スル事

但シ此一條検事囑ニ應スル者ナリ

一疑讞及罪死ニ入ル者ハ律ヲ擬シ伺ノ文ヲ草シテ判事ニ呈ス判事異議ナケレハ庶務課ニ交付シ清昼成テ本省ヘ申請シ回報ヲ待テ罰文ヲ草ス等ノ手順第二條ト同シ

一刑律中疑義ノ條アレハ伺昼ヲ草シ判事ニ呈シ清閱ヲ經テ庶務課ニ付スル事

一本省日誌中各府縣裁判所ヨリ伺出ル刑律ニ文全載シ有之比援ニ可相成指令ハ刑律指令隨錄ニ編入スル事但當裁判所ノ伺ハ案罪ノ指令ト

雖モ隨錄ニ載ス

一外官吏過誤失錯ノ罪ヲ犯シ進退伺出ルヲ落着掛ヨリ通付スレハ律ニ依リ刑名ヲ論シ其手順第二條ニ同シ

一遺失物ヲ得及ヒ囚人ヲ失シテ届ケ出レハ指令ノ文ヲ草シ手順又上ニ同シ

## 罰文案

### 申渡

何国何郡何村

農

苗字名

其方儀何村何所ニ於テ

骰子 骨牌

博奕致スコ賭博律ニ依リ杖八十

又ハ可申付処ニ付ナレハ老年ニ付十五以下幼年ニ付取贖金二円申付ルナレハ

但杖罪済ノ上ハ村役人ヘ引渡シ遣ス又ハ取贖金ハ五日ノ内ニ相納メヨ

右之通申渡ス間其旨存スヘシ

年号月

右村役人

何縣管轄何国何郡何村

出生

当時無籍

其方儀本籍ヲ脱シ逃込致シ

又ハ無沙汰ニ家出致シ居リ又ハ何某ヲ申勸メハ何某ヨリ申勸ムルニ同意致シ

何村何某宅へ忍入り衣類其外盜取ル賍金一円餘且何村何所ニ

於テ

骰子  
骨牌

博奕致ス右科ノ内

ニ罪ナレハ  
ニ罪ノ内

賭博律ニ依リ杖八十申付ル

但處刑済ノ上ハ宿村送りヲ以テ本管へ引渡シ遣ス

何村

其方儀何某ヨリ被盜取品現在ノ分ハ下ケ渡ス費用致ス分ハ損失ト心得ヘシ

其方儀何某ヨリ質ニ取ル品ハ

又ハ買取  
ル品ハ

不正ニ付取上ル

又ハ取上ル間代價ハ  
何某ヨリ償受ヘシ

其方儀何某ヨリ被頼何某へ質ニ入レ遣ス品又ハ賣渡シ  
遣ス品ハ不正ニ付同人ヨリ取上ル間代價ハ其方ヨリ償フヘシ

右ノ者何某ヨリ被取盜品ハ費用致スニ付損失ト心得ヘシ

右村々役人

右之通申渡ス間其旨ニ存スヘシ又ハ其旨ニ存シ何某へハ最寄役  
人ヨリ又ハ其方ヨリ通達スヘシ

其方儀火ヲ失シ自宅焼亡致ス科又ハ焼亡致スノミナラ  
ス隣家迄延焼ニ及科失火律ニ依リ事情惊ニ付答二十ノ贖罪金二円五十錢又ハ答四十  
ノ贖金三円申付ル  
但贖罪金ハ五日ノ内ニ相納メヨ

其方儀刃物ヲ携ヘ又ハ棒  
ヲ携ヘ誰某ヲ同意致サセ又ハ誰某ノ  
発意ニ随ヒ誰某宅へ押入家内ヲ威シ衣類又ハ  
金錢其外奪取ル科強盜律ニ依リ斬罪  
申付ル

但不持兇器ノ時ハ刃物ヲ携ヘノ文字ヲ省キ奪取ル贓金何円ノ科強盜律ニ依リ懲役可年申付ルト作ルヘシ

其方儀誰某ヲ申勸メ又ハ誰某ノ申勸  
メニ同意イタシ誰某宅へ忍入衣類金錢等盜取ル贓金何円ノ科竊盜律ニ依リ又ハ從タルヲ以  
テ一等ヲ減シ答又ハ  
杖何十可

申付所事露顯ニ及ハサル内自ラ首出又ハ首出シテ盜賊ヲ償フヲ以テ其罪ヲ差免ススルヲ以テ二等ヲ減シ答又ハ杖何十申付ル

其方儀誰某ヘ何々ノ事ヨリ遺恨有之工夫ヲ以テ又ハ誰某ヲ語合ヒ又ハ誰某ノ企ニ同意致シ殺害ニ及フ科謀殺律ニ依リ斬罪申付ル

其方儀誰某ト何々事ニヨリ争聞致シ一時出来心ニテ同人ヲ及殺害科故殺律ニ依リ斬罪申付ル

其方儀誰某ト何々ノ事ヨリ争論ノ末同人ヲ毆殺致スコ聞毆殺人律ニ依リ懲役終身申付ル又ハ可申付処理直ニシテ後ニ手ヲ下タスヲ以テ二等ヲ減シ懲役七年申付ル

### 断獄訴口順序

第一條 毎朝八時出頭着到人名簿二冊ヲ訴口下テーブル上ニ差出置着到之人員郡村氏名且ツ何号掛リト銘々ニ記載致サセ本人又ハ引合人等ヨリ差出処之名刺前日ヨリ喚出置分ハ九時限リニ差出サセ掛リ之解部ヘ送致ス又落着掛エ送致スル分モ前同断之支

但シ即剋喚出シノ分又ハ病氣全快届或ハ尋等申付置ク日限ニ付着訴且ツ差紙返上着届ケ名前書差出ス分ハ此限ニ非ス

第二條 毎朝当番之郷宿ヨリ氏名書二葉ヲ差出サセ一葉ヲ見坐ニ付ス一葉ヲ訴所エ張り置キ外ニ当番帳ヘ当番郷宿之

氏名押印サスヘキ支

第三條 贖罪收贖料不正金品總テ追徴上納金等鄉村ヨリ差出ス時ハ請印簿ヘ記載シ即時落着掛ヘ相渡シ受領之印ヲ取り証書ヲ受取納人ニ付シ落着掛之中聞ヲ待テ歸村申付ル

但シ不正金ハ上納之節必上納書一冊相添差出サセ候支

第四條 不正之品上納之節モ前同断又ハ解部ヨリ之指令ニヨリ不正品取上ケル時ハ上納書二冊差出サセ其一品物ヘ添ヘ落着掛リヘ送致シ割印ヲ取り其一ツヲ掛リ之解部ヘ差出ス

第五條 警察出張所ヨリ来状ハ勿論其他鄉村ヨリ差出ス処之吟味願書并ニ盜難拾物落シ物捨物火災變事等之諸届檢事局宛之分ハ總テ同局ヘ送致スヘキ支

第六條 他管轄之者其府縣ヨリ添翰等持参着訴之名刺差出ス時ハ直チニ庶務課ヘ送致ス

但シ他管轄ヨリ之来帖等ハ總テ同課ヘ可差出支

第七條 本人又ハ引合之者差出ス処之始末書其外總而之書状落印脱字等無之様一見注意致シ可差出支

第八條 即刻喚出シ等之節庶務課ヨリ受取ル所之喚出シ簿ヲ直チニ郷宿之当番ヘ相渡シ本人又ハ引合之者共滯留スル処之郷宿ニ受印致サセ庶務課ヘ返付ス喚出シ之者名前書差出セハ直ニ掛リ解部ヘ進呈ス遅延スル時ハ催促シ若不参等之者アル時ハ請印致ス処ノ郷宿ヲ督責ス

但シ差掛リ即刻喚出之節解部ヨリ受取ル処ノ名宛之書付モ前條喚出シ之手続ニ同シ

第九條 囚人即刻喚出アル時ハ庶務ヨリ受取ル処之喚出帳ヲ囚獄掛リヘ付シ喚出帳受印致シ持参スル時ハ之ヲ請取リ又庶務課ヘ返致ス

第十條 囚人例刻喚出シ之分ハ前日午後四時庶務課ヨリ喚出帳ヲ給仕ニ付シ来ル即之ヲ請取リ直ニ囚獄掛リヘ付シ翌



朝之ヲ請取り庶務課へ返付ス

第十一條 郷宿ニ滞留スル処之本人或ハ引合之者共定例喚出ハ前日午後四時喚出帳ヲ給仕ニ付シ来之ヲ請取り郷宿之当番ヘ付シ其止宿スル處郷宿ニ銘々請印致サセ右帳ヲ請取庶務課へ返致ス

第十二條 郷村喚出シ之差紙ハ庶務課ヨリ通付録ニ記シ給仕ニ付シ来ル之ヲ請取右帳ニ請印シ即時当番之郷宿ヘ相渡ス

但差紙請印帳ニ請印ヲ取ル

第十三條 出獄之上宿預又ハ村預等之請書ハ掛リ解部之番號ヲ記載致サセ之ヲ請取ル落着掛ヨリ宿預ケ申付ル分ハ当番掛リト番号ヲ記サセ総テ請書類ハ落着ヘ送致ス

但逃走人尋申付ル請書又ハ一時村預ケ或ハ病氣且ツ御用都合ニヨリ一時帰村申付ル請書等之落着前ニ係ル分ハ掛解部ニ差出ス

第十四條 解部ヨリ之指揮ニヨリ訴所於テ帰村申付ル支アリ

### 断獄見坐心得

#### 第一條

一出勤ノ儀ハ日々兩人ツ、早出想心得出頭ノ上ハ直チニ解部ヘ届出退散ノ節モ同様断ノ上引取可申事

#### 第二條

一非常ノ為休暇日ハ勿論平日タリモ相應ノ人員交番ニ宅守ヲ立置可申支

#### 第三條

一 鞠問場其外勤方ノ儀ハ席順等ニ拘ラス公平ヲ本トシ相勤可申事

第四條

一 囚徒出入並鞠問場ニ於テ吟味ノ節等不取締ノ儀無之様可致事

第五條

一 囚徒並預ケ人等鞠問場ハ勿論扣所ニ於テモ談話為致申間敷事

第六條

一 都テ吟味筋ノ義ハ仮令親族ノ者タリモ決テ口外致間敷事

第七條

一 總テ吟味ノ節心障リノ儀等聞込候ハ、早速其筋ヘ可申出事

第八條

一 囚徒疾病ニテ歩行不自由ナル者ハ心切ニ取扱可申事

第九條

一 囚徒並一件連累ノ者等断獄庭ヘ操入候節ハ掛リ解部ヨリ受取ル名前書ヲ以逸々名当リ致シ候上掛リ解部ヘ申入候

事

第十條

一 前同断初席落着及ヒ口書申付候節ハ見坐二人ツ、相詰可申事

但連累多人数ニ亘リ候時ハ増員可致事

第十一條

一 前全断掛解部吟味ノ節ハ必ス見坐一人ツ、相詰可申事

但拷問ノ時ハ二人ツ、ニ候事

#### 第十二條

一 前同断落着ノ節笞杖以上ノ者繩無之分ハ鍵繩ニテ縛シ扣所ヘ差置新治縣囚獄掛リヘ引渡候事

#### 第十三條

一 死刑以上ノ者罰文申渡ノ節ハ見坐二人ツ、繩ヲ取り猶二人相詰護衛致シ候事

但申渡済断獄庭外ニ於テ囚獄掛リヘ引渡シ梟首ハ扣所ニテ切繩ニ打替相渡候事

#### 第十四條

一 囚徒入牢申付候節ハ鍵繩ニテ縛シ囚獄掛リヘ引渡候事

但衣類下帶其外共得ト入念相改メ法禁ノ品ハ取上ケ落着掛ヘ差出候事

#### 第十五條

一 囚徒受取候節本人ノ所持品ハ検事局ヨリ直ニ落着掛ヘ引渡候儀ト可相心得候事

#### 第十六條

一 全断引渡候節並出牢預ケ等ニ相成時ハ断獄庭ニ於テ繩ヲ解キ相渡候事

但本人所持品ハ落着掛ヨリ差添人ハ引取人ヘ相渡候事

#### 第十七條

一 罪案申付候節華士族卒入牢ノ分ハ花押平民ハ拇印ト相心得可申候事

右断獄庭ノ手続兼テ相心得可申支

(d) 『出納之部』

當課章程編輯之儀被命候得共未定額金御確定不相成檢支職制モ御更正中ニ付将来不易之規則ハ難定候間目今現務ノ順序ヲ以漸次校正可然奉存候仍而別冊出納所務順序一部編制相伺候也

明治七年三月

出納課

十五等出仕 草間 宣勝  
權 少 属 岩原 性一

權少判支三島毅殿

伺之通當分遵守可然事

出納課所務順序

第一章 管主スル簿書四十四部左ノ如シ

日計簿 有高表当分日計簿ヲ以テ兼之 經費金受拂帳 追算簿 差繼帳小冊ニ付追算簿ト合冊 收入金受拂帳

官禄税受拂帳小冊ニ付收入金受拂帳ト合冊 證書綴込 諸費渡帳 假拂證書綴込 月計表 備品元帳 備品分附帳

備品日々表 備品通帳 備品注文録 雜物受拂帳 雜物日々表 細工紙渡帳 小買物通帳

諸品渡帳各課一部ツ、並ニ玄關詰衛門詰相兼一部上小使一部都合七部 營繕目論見編冊 郵便扱所受領印帳 郵便切手受拂帳 陸運并飛脚受印帳

囚人検査医員呼出記 有籍囚人入費取立帳 贓物預リ帳 贖罪取贖金收納帳 贓金没官帳

科料罰金收入帳小冊ニ付贖罪取贖金收納帳ト合冊 本省文通録 後鑑録 布告刻紙編冊 官員録 任解免婦録

通付録 雜書綴込

第二章 出納金員ヲ登記スル簿書之体裁ハ院省出納順序ニ從フハ勿論ト雖モ追テ銀行等へ出納現務取扱ハセ候迄簡ニシテ差謬ナキヲ要シ当分遵守スルノ所ノ概畧ヲ左ニ掲ク

第三章 本假納拂ハ勿論返納交換等ニ至ル迄日々出納スル一切之金員ハ以下七章ニ掲クル簿書五部ヲ以テ無漏計算シ式ノ如ク各部ノ合金ヲ日計簿ニ登記シ差引現在ノ有高ヲ金庫有金ト照合出納違ヒナキヲ知ルヘシ

第四章 毎月盡日迄ニ其月ノ諸費諸拂無漏仕拂翌月二日ニ至リ有高表ヲ製シ主任検印ノ上所長ノ検印ヲ受ケ淨書シテ本省ニ送致シ原書ハ文通録ニ編ム

但当日々ノ有高表ハ日計簿ヲ以テ兼之故ニ差繼キ拂フヘキ分並本省へ納ムヘキ分共日計簿而已詳記スヘシ

第五章 本省ヨリ回金到着スレハ直ニ経費金受拂帳元受之部ニ記載シ所長名印ノ証書ヲ作り受拂帳ト割印シテ本省へ回ス

第六章 総テ本拂ハ受取人ヨリ証書諸買物等拂渡ノ類  
初無印ニテ取ル或ハ明細書旅費或ハ探案費  
之類調印ノ分ヲ取り月給宿代ノ如キハ当課ニテ渡シ帳ヲ作

リ各精密調査算定検印ノ上所長之検印ヲ受ケ而シテ経費金受拂帳へ費目ニ随ヒ部分詳記シ其金員ヲ支出シテ受取人へ付シ證書并ニ渡シ帳ニ受領之印ヲ取り旅費或ハ探案費ノ類ノ諸費渡シ帳  
ニ印ヲ取り明細書証書綴込ニ編ム諸書綴込ニ綴ム

第七章 假拂並ニ立替拂ハ受取人ニ金員ト事由ヲ書面ニ作ラセ主任検印ノ上所長之決ヲ取り而シテ追算簿へ詳記シ其金員ヲ授付シテ右書面ノ末ニ受領ノ印ヲ取り假拂証書綴込ニ編ム

第八章 假拂決算ニ至ル時ハ其決算高ヲ更ニ本拂ニ致シ最前ノ假拂高ハ全ク返納トシ追算簿ニ登記シ納ノ証書ヲ作り納人ニ付ス而シテ假拂ノ廉ヲ消抹スヘシ

但半ハ決算半ハ未決算之分ハ一旦全金返納更ニ未決算ノ金員ヲ假拂ニ立順次如此シテ月末ニ至リ調査決未決ヲ辨別シ遅緩ナルアレハ之ヲ督促スルヲ要ス

第九章 官員月給旅費等總テ一旦本拂之後事故アリ返納アレハ其金員事由ヲ差繼帳ニ詳記シ月末ニ至リ同種拂高ノ内ヘ差繼仕拂ヘシ

第十章 廳中不用品賣却代等一切之收入金ハ收入金受拂帳ニ金員事由ヲ詳記シ受納証書ヲ作り納人ニ付ス而シテ別ニ勘定帳ヲ整理シ本省ニ上納スヘシ

第十一章 官祿税ハ月給渡ノ節取立官祿税受拂帳ヘ金員并ニ官姓名ヲ詳記シ納済ノ証書ヲ作り受拂帳ト割印シ納人ニ付ス而シテ収税帳ヲ整理シ年四回本省ニ上納スヘシ

第十二章 諸拂ハ一月六度之定日ハ口口ヲ極メ前々日迄ニ受取方申出ル分ヲ受付ス尤臨機急度ハ此限ニ非ス

但豫而金質改方申付候色川三良兵衛尾形徳兵衛兩名ニテ毎月交番定日ハ勿論臨時出納ノ都度出廳大小貨幣引換支出致サセ其時々殘金ヲ封セシメ貯藏スヘシ

第十三章 官員月給宿代ハ其月十五日ニ至ラハ官級人名官員錄ニアリヲ調ヘ渡シ帳ヲ作り前月分ノ渡シ帳並ニ任解錄ニ照合シ進退異同ヲ考ヘ算定之上必ス十七日ニハ第六章ノ序以分賦スヘシ

第十四章 官員旅費日當ハ金員並ニ往返里数等ノ明細書ヲ取り発歸錄並ニ定則ニ照合シ第六章ノ順序ヲ以テ給與諸費渡シ帳ニ受領ノ印ヲ取り明細書ハ証書綴込ニ編ム

第十五章 月末ニ至リ給仕小使人員並ニ不参之有無出勤簿ニアリ毎月庶務課ヨリ回ルヲ調ヘ給仕ハ休日並ニ不参ノ日ヲ除キ日給合計若干

小使ハ不参ノ日而已ヲ除キ其月ノ大小日數ト現日數トヲ以テ給與ノ金高ヲ算定シ第六章ノ順序ヲ以テ給與スヘシ

第十六章 毎月廿五日ニ至リ同日迄ノ小買物通備品帳通營繕費書受印帳飛脚賃受印帳賍物評價人給料出勤日數落着掛ヨリ毎月調書回ル宿直賄料定直ハ全月臨時賄ハ廿

五日ニ以上六廉其外共諸拂ハ可成丈ケ一ヶ月取纏メ証書ヲ作ラセ初無印ニテ取り前頭ノ簿書ニ照合シ第六章ノ順序ヲ

以テ拂渡シ其筋右証書ニ受領ノ印ヲ取り綴込ニ編ム

但十二月ハ盡日迄ノ入費ヲ調ヘ仕拂其年ノ本拂ニ可立分翌年ヘ越サ、ル様致スヘシ

第十七章 探索捕亡臨時雇手先給料並ニ探索捕亡入費囚人護送費ノ如キハ主務ノ官吏已ニ拂来ル所ノ証書ニ明細書ヲ添差出サハ第六章ノ順序ヲ以テ授付スヘシ

第十八章 天長節新年宴紀元節等ノ賜饌料ハ官級人員官員録ニテアリヲ調ヘ渡シ帳ヲ製シ第六章ノ順序ヲ以テ当日之ヲ分配スヘシ

第十九章 毎月七日ヲ以テ前月ノ勘定帳ヲ本省ニ送ルノ期トス其仕方ハ諸費諸拂全仕拂之上直ニ全月分本拂ノ証書ヲ綴込ヨリ抜キ同種部分編冊シテ經費金受拂帳ニ照合シ何月分小譯ト帳ヲ稱ス之ヲ以テ諸費明細表並ニ總計表ヲ作り又右受拂帳ヲ以テ勘定帳ヲ整理シ各部成ツテ再ヒ受拂帳ヲ根拠トシ照査算定差謬ナキヲ得レハ検印ノ上所長之検印ヲ受ケ而シテ左ノ各部ヲ作り本省ニ送致シ原書ハ藏貯シテ後照ニ供ス

勘定帳

總計表  
明細表  
當繕通算表  
同明細表  
各正副

小譯帳写一冊

第二十章 毎月勘定帳整理ノ上元金並ニ拂金ハ費目ニ随ヒ其金員ヲ月計表ニ登記シ一目ニシテ月費明瞭ニシ前後考較調査ノ便ナルヲ要ス

第二十一章 廳用備品ハ買入レノ時々其数目ヲ通帳ヨリ備品元帳ニ移載シ所長ノ検印ヲ受ケ諸課ニ分付スレハ諸品渡シ帳ニ受領ノ印ヲ取り備品分附帳ニ詳記ス又返納ノ片ハ受領印ヲ消抹ナサシメ其旨分附帳ニ記入シ毎月所長ニ乞ヒ現在ヲ照檢ス

第二十二章 備品ノ新調並ニ修繕廃棄交換返納貯用ニ至ル迄日々ノ受渡シヲ備品日々表ニ登記ス故ニ損傷交換ハ元帳

分附帳ニ記サス漸次修理ヲ加ヘ廃棄ノ品ハ毎月現數調査ノ片元帳ニ記入シ所長ノ檢印ヲ受ヘシ

第二十四章 <sup>(イ)</sup> 官員動具 ルイステーフ 並ニ当用器物 火鉢土瓶 ハ毎月豫メ應用ノ數ヲ計リ新調或ハ修繕ノ事ヲ所長ニ申シ工商ニ

命シテ代價並ニ納メ期限ノ受書ヲ作ラセ廉昂考較ノ上再ヒ所長之決ヲ取り買入等ノ事ヲ約シ受書ハ備品注文録ニ編ム而シテ期限ニ至リ約來レハ製作ノ良苦ヲ檢査ノ上相納メ通帳ニ品價員數ヲ記サセ第十六章ノ順序ヲ以テ拂金授與スヘシ

第二十四章 前章ノ外各課ニ於テ新規ニ所用スヘキ器物ハ其課主務ノ者ヨリ品名ト事由ヲ記タル書面ヲ取り 調密ノ品ハ圖面ヲ添ヘ 所長ノ檢印ヲ受ケ前章ノ順序ヲ以テ買入レ授附スヘシ

第二十五章 書籍ハ庶務課ノ所轄ニ定ルニ付他課ヘハ一切相渡サス總テ庶務課ヘ渡シ切ニ立テ受拂ハ雜物ノ簿冊ニ兼テ決ス諸野版ハ當課所轄シ紙細工ノ者ニ付ス

第二十六章 筆墨紙並ニ炭油等ノ類ヲ雜物ト稱シ買入レノ時々小買物通帳ヨリ雜物受拂帳ニ移載シ各員ニ分附スレハ諸品渡シ帳ニ受領ノ印ヲ取り一月分ヲ集計シテ受拂帳ニ拂高ヲ登記シ差引現在數ト照合シテ所長ノ檢印ヲ受クヘシ且別ニ日々ノ受ヲ通帳並ニ渡シ帳ヨリ雜物日々表ニ登記シ散失ナキヲ要ス

第二十七章 雜物日々表ヲ以テ時々應用ノ數ヲ計リ品物ノ良否代價ノ廉昂ヲ考較シテ之ヲ買入小買物通帳ニ品價員數ヲ記サセ第十六章之順序ヲ以テ拂金授與スヘシ

第二十八章 界紙或ハ袋等ノ製作ハ上小使ニ命シ原紙ヲ細工紙渡シ帳ニ記シ受領ノ印ヲ取り而シテ納來レハ其旨渡シ帳ニ朱書シ係リ檢印スモシ漉切レ摺損等アレハ其數ヲ明書シ結紐ニ支用ス餘アレハ賣却スヘシ

但雜物受拂帳ニハ白紙ニテ拂切り界紙袋等ニ變製ノ上ハ更ニ夫々之部ヘ元ニ立ヘシ

第二十九章 小破營繕一月五拾圓以下ニ係ル者ハ便宜所分シ五拾圓ヲ越ル者ハ本省ニ伺ヘ許可ヲ得テ後施行スルヲ則



トス

第三十章 建増或ハ模様替等総テ新規之作事一月二十五圓以下ニ係ル者ハ前章月額五十圓ノ内ヲ以テ所分シ二十五圓ヲ超越スル者ハ許可ヲ得テ施行スヘシ

第三十一章 廳中雨漏或ハ根太數戸締外圍等時々見廻リ大風雨ノキハ一層注意若シ破損アレハ大破ニ至ラサル内速ニ職工ヲシテ仕様書并ニ入費受書ヲ作ラセ其當否ヲ考量シ所長ノ決ヲ取り修繕ヲ命シ受書等ハ營繕目論見編冊ニ編ミ成業ノ後第十六章ノ順序ヲ以テ拂金授附スヘシ

第三十二章 模様替或ハ建継等有形修繕ノ外新規ノ事ハ主張ノ課ヨリ図面並ニ事由書ヲ取り所長ニ伺ヒ仕様書等ヲ職工ニ作ラセ前章ノ順序ヲ以テ施行スヘシ

第三十三章 本省並ニ各所ヘ郵便ニテ差立候書狀物品ハ各課ヨリ当課ニ回シ各封ニ量目ヲ朱書シ規則ニ準ヒ稅券ヲ貼シ郵便扱所受領印帳ニ詳記シ扱所ヘ持タセ遣シ受領印ヲ取り後照ニ供ス

第三十四章 郵便稅券ハ豫メ一ヶ月ノ入用高ヲ見積リ買入郵便切手受拂帳ニ登記シ所長ノ檢印ヲ受ケ日々ノ拂高ヲ記入シ毎月受拂ヲ調査シテ現在ト照合シ所長ノ檢閱ニ供ス

第三十五章 陸運會社 重量ノ品ニテ檢并ニ輪ヲ厭ハサル分 臨時仕立飛脚 郵便ノ設アリト雖モ支道ニテ急務ヲ辨シ難キ向 ヲ以テ通送ノ書狀物品ハ各課ヨリ当課ニ廻シ陸運

并飛脚受印帳ニ詳記シテ會社或ハ飛脚ヨリ受領印ヲ取り第十六章ノ順序ヲ以テ賃金授附スヘシ

第三十七章 断獄課ニ於テ病囚或ハ被傷人等醫員ニ命シ檢査ノ節ハ囚人檢査醫員喚出記ニ係リ解部醫員之姓名并ニ月日ヲ記シ檢印シテ之ヲ回ス乃チ月末ニ至リ第十六章之順序ヲ以テ雇料ヲ給ス

第三十七章 有籍囚人護送ノ節賄料等一身ニ属スル入費ハ私費ニ付護送官吏一時立替来ル所之証書ヲ取り第七章ノ順序ヲ以テ追算簿ヲ以テ有籍囚人入費取立帳ニ移載シ落着掛ニ談示決放ノ日ニ至リ処刑申渡シヲ待チ直ニ上納ノコヲ

村吏ニ命ス村吏上納スレハ受納証書ヲ付シ追算簿等ヲ消抹ス

但他管轄ノ者ハ其管廳ニ懸合追テ回金ノ上受納証書ニ回答ヲ添ヘ送致ス

第三十八章 罪囚ノ贓物ヲ落着掛ヨリ預ケ帳ニ録シテ送レハ贓物預リ帳ニ移載シ物品員数<sup>品員ノ調ハ落着掛ニテ受取ヲ照檢シルル并立會再調ノ手數ヲ欠ク</sup>テ彼ノ預ケ帳ニ受領印ヲ押シ贓物ハ番号ト囚人ノ姓名ヲ記シタル札ヲ付シ藏貯ス

第三十九章 預リ置ク贓物受戻シノ片ハ預リ帳ニ何月何日落着掛ヘ返スト記シ物品引渡ノ上彼ノ受領印ヲ取り帳記ヲ消抹スヘシ

第四十章 贖罪収贖金并ニ科料罰金ヲ落着掛ヨリ彼ノ簿冊ニ記シ送付スレハ各收納帳ニ移載シ金員照查ノ上受領印ヲ押シ当課收納帳ニ彼ノ檢印ヲ取り後照ニ供ス

第四十一章 贓金并ニ没官品ヲ落着掛ヨリ彼ノ簿冊ニ記シ送附スレハ贓物没官帳ニ移載シ金員並ニ物品ヲ照檢ス以下同断

第四十二章 前二章ニ係ル金員并ニ物品共毎月所長ニ乞ヒ檢閱ヲ受ケ年四回<sup>一月四月七月十月</sup>前三ケ月分ヲ本省ニ上納スヘシ尤物品ハ入札賣却シテ代價ヲ納ム

第四十三章 凡本省ヨリノ達書ヲ始諸伺問合等ニ至ル迄一切之文章往復ヲ本省文通録ニ録ス

第四十四章 布告達書ハ勿論伺問合共将来ノ規則ト成候者ハ無漏後鑑録ニ録ス

但布告刻紙ハ乃チ布告刻紙編冊ニ編ミ後鑑録ニ其目ヲ掲ク

第四十五章 当裁判所在勤之官員等級姓名ヲ官員録ニ詳記ス

第四十六章 任解並ニ交代出張等ノ発歸ハ月給旅費精算照合ノ為メ任解発歸録ヘ庶務課ニテ記入ス

第四十七章 諸課ニ送付スル書類物品共時々通付録ニ記シ受領印ヲ取ル

第四十八章 以上四十八章ニ掲クル外一切ノ雜書綴込ニ編ミ散失ナキヲ要ス

第四十九章 上下小使ノ勤惰ヲ督視シ所長ニ具狀シテ進退スヘシ故ニ別紙小使所務章程ヲ豫定ス

右之四十九章ハ目今現務ノ順序ヲ掲クル者ニシテ敢テ将来ノ法方ト云フニ非ス故ニ後ノ緊要事務之沿革ニ從ヒ冗ヲ省キ欠ヲ補ヒ校正シテ不易ノ方法ヲ立ンコトヲ要ス且檻倉費用之件モ目今現務無之ニ付豫定セス追テ設為ノ上實際挙行以テ編入スヘシ

新治裁判所

明治七年三月

出納課

簿書之式

◎印ハ順序書ト知ルヘシ

日計簿

何月何日

所長ノ檢印二廉以上ハ通計ノミニ受ク

○一金何程 ○主任檢印一廉毎ニ押ス

何月分経費元金本省ヨリ受取

一金何程 ○ 不用品賣拂代

一金何程 ○ 假渡返納

一金何程 ○ 本拂ノ内返納

○通計金何程○

○金何程○ 本拂

○金何程○ 假拂

○差引金何程○ 現在有高

内金何程 本省へ可納

外金何程 假拂

差引金何程 元金

内金何程 差継可仕拂分

◎如此日々ノ出納ヲ通算登記シ現在数等一目瞭然ナルヲ要ス

経費金受拂帳

元受之部

所長ノ検印二廉以上へ合計而已ニ受ク  
何月何日

○一金何程○——主任検印一廉毎ニ押ス 前月ヨリ越高

何月何日

○一金何程○ 本月分元金本省ヨリ受取

本省ヨリノ回金受領証書ト割印

○合計金何程○

◎二日以上合計ヲ記ス

## 拂出之部

月給

旅費

諸雇給

備品

小買物

人足賃

總テ如此費目  
ニ從ヒ部分ス

月給

所長ノ検印ニ廉以上合計而已ニ受ク  
何月何日

○一金何程○—主任検印

何月分月給何官誰外何名渡

内金何程○

差繼拂

何月何日

一金何程○

何官誰昇進ニ付増月給渡

○通計金何程○

◎任解或ハ交代等ニテ一ヶ月分惣官員ノ月給ヲ  
幾度ニモ渡スルハ月末ニ至リ如此通計ヲ記ス

内金何程○

差繼拂

旅費

何月何日

○一金何程○

何官誰何所出張ニ付旅費日当渡

◎一日ニ廉以上ハ小以金ヲ記シ  
月末ニ至リ通計ヲ記スヘシ

小買物

何月何日

○一金何程○

何品買上代何ノ誰渡

一金何程○

何品外幾品買上代何ノ誰渡

○小以金何程○

◎如此ニシテ月末ニ至リ通計ヲ記スヘシ

◎以上三廉ノ例ニ倣ヒ其部分ヘ記載スヘシ

拂金合計之部

所長ノ檢印二廉以上合計而已ニ受ク  
何月何日

○一金何程○——主任檢印

何月何日

一金何程○

内金何程○

○合計金何程○

月給 旅費 雇給 何々  
◎如此其日拂出ノ費目ヲ記シ合金ヲ登記ス

前ニ同シ

差繼拂

◎二日以上合計ヲ記ス

差引残ノ部

所長ノ檢印

何月何日

○一金何程○——主任檢印

何月何日

○一金何程○

何月何日

○一金何程○

月末ニ至リ差懸拂高ヲ調如此記ス

○合金何程

追算簿

何月何日

所長ノ検印ニ廉以上ハ小以金而巳ニ受ク  
何月何日返納

イ ○一金百円○——主任検印

一金五拾円○——主任検印

ロ ○小以金百五拾円○

何月何日

○一金六拾円○

ハ ○通計金貳百拾円○

内

受領証書ト所長ノ割印

ニ ○金百円○

差引

◎ 本月仕拂高何程ノ処返納金ヲ以  
テ差懸拂取計候ニ付残金増加

◎ 日々拂出ノ金員ヲイ印ノ如ク記シニ廉以上ロ印ノ如ク小計ヲ記シ累日ノ通計ヲハ印ノ如ク記  
シ決算返納ノハハ式ノ如ク朱ニテ抹消シニ印ノ如ク記シホ印ノ如ク差引現在未決算高ヲ記ス

何々ニ付假拂  
何ノ誰渡

何々用見積  
何ノ誰

何々

何月何日何ノ誰  
何々仮拂返納

◎ 教廉返納ノハハ一廉毎如此詳  
記シ通計ヲ願シ差引スヘシ

ホ○金百拾円○

差継帳

受納証書ト所長割印ス

何月何日

金何程○——主任検印

何ノ誰或ハ何月分月給  
何月何日出張旅費金何程  
何月何日受取候内何々ニ付返納

此金何月尽日本本拂ノ内へ差継拂

◎出納小ナルカ故先來如此基稀也仍テ其式ヲ署ス若一月間ニ廉  
以上アレニ尽日ニ至リ合計ヲ記載シ部分ヲ内訳ニ詳配スヘシ

収入金受拂帳

受領証書ト所長割印ス

何月何日

金何程○——主任検印

何々収入金

何月何日

一金何程○

何々拂代何ノ誰納

○合計金何程○

此金何月何日本省納

官禄税受拂帳



〔即今所長一名ニ付出納課ノ印ヲ割印ス  
何月何日〕

（一）金何程——主任検印

此金何月何日本省納

何官誰本月份官禄税納

◎常用界紙

◎二人以上ハ合計ヲ記ス

◎印シハ受拂帳へ所長割印

證

（一）金何程

右ハ本月份月給旅費其他為諸費御廻正ニ受取候也

年号月日

本省會計局長宛

新治裁判

所長官姓名印

追算簿ニ所長割印ス

一金何程

右ハ何月何日何々ニ付仮渡金返納正ニ受取候也

年号

月日

宛名

証

新治裁判所

出納課印

差継帳へ所長割印ス

一金何程

右ハ何月何日又ハ何月分月給  
何方出張旅費渡済之内何々ニ付返納正ニ受取候也

證

新治裁判所

出納課印

年号

月日

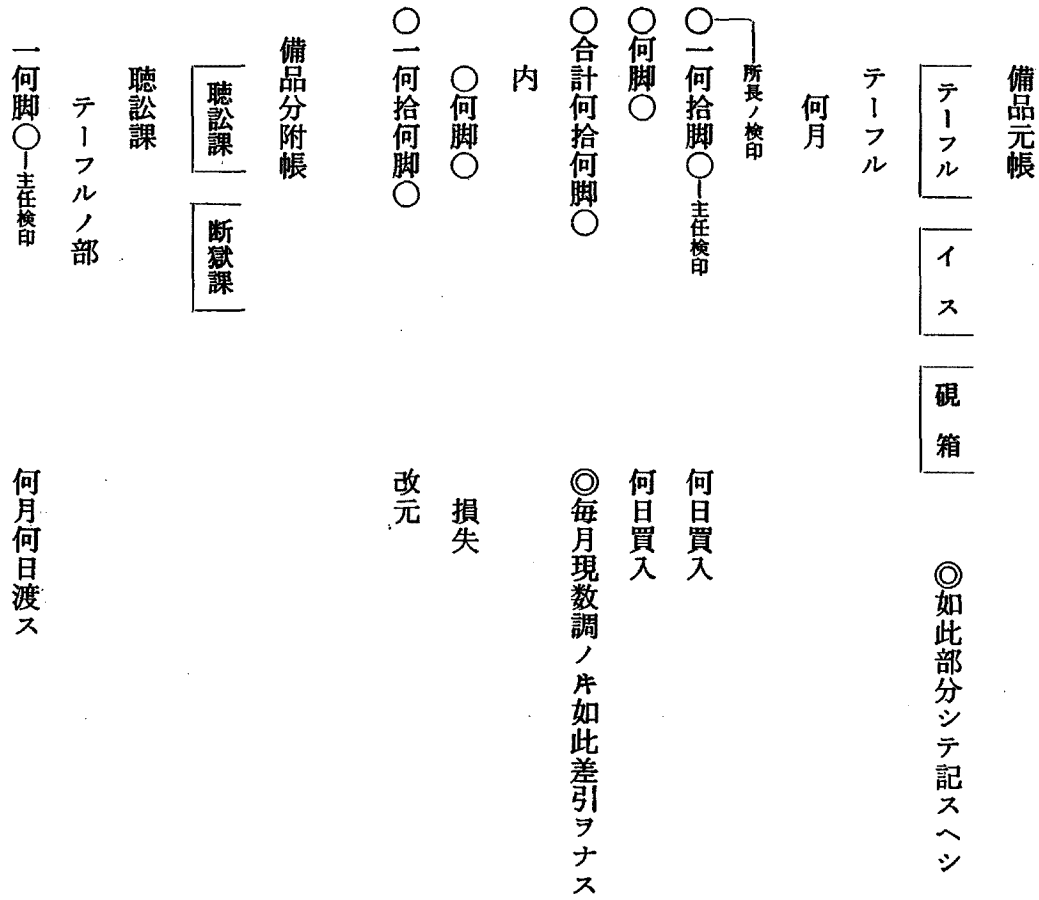
宛名

<p>証</p> <p>一金何程</p> <p>右ハ何月分官禄税上納正ニ受取候也</p> <p>年号</p> <p>月日</p> <p>宛名</p> <p>新治裁判所</p> <p>出納課印</p>	<p>証</p> <p>収入金受拂帳へ所長割印</p> <p>一金何程</p> <p>右ハ何品拂下代上納正ニ受取候也</p> <p>年号</p> <p>月日</p> <p>新治裁判所</p> <p>出納課印</p> <p>何ノ誰</p>
---	--

以下ハ費目ノ数ヲ  
以テ系数ヲ区画ス  
ヘシ差額拂二廉以  
上ノ片ハ此処ヘ合  
計ヲ出ス

同 払	累 月 元 金	現 有 高	仮 払	残 金	合 計	合 計	何 々	備 品	雇 給	旅 費	小 以	差 繼	月 給	合 計	元 金	越 高	月 計 表
		百 円	百 円	二 百 円		千 八 百 円		五 十 円	百 五 十 円	百 円	千 六 百 円		千 五 百 円	二 千 五 百 円	二 千 円	二 百 円	一 月
五 十 円	四 千 円	二 百 円	五 十 円	五 十 円		千 九 百 五 十 円	百 円		百 五 十 円	二 百 円		百 円	千 五 百 円		二 千 円		二 月
																	三 月
																	四 月
																	五 月
																	六 月
																	七 月
																	八 月
																	九 月
																	十 月
																	十 一 月
																	十 二 月
																	年 計

◎ 此外勘定帳等ノ  
式ハ院省出納順  
序並ニ前例ニ照  
準スヘシ



雜物受拂帳

美濃紙 半紙 筆 墨 油

ル フ ー テ

	二十日	十三日	十日	四日	二日	何月
	十				二十	買入
		一				損失
	二十九	十九				改元
	十三			一	十五	渡
		棄 一	修 一			返納
	二十七	十四	十五	十六		渡合計
	二	五	五	四	五	貯

備品日々表

一何脚

差引

返納合計何脚○

渡合計何脚○

一何脚○

一何脚○

何月改

同何日返納

同何日渡ス

ス イ

						何月
						買入
						損失
						改元
						渡
						返納
						渡合計
						貯

美濃紙ノ部

何月

一何拾帖〇—主在検印

一何拾帖〇

何日買入

何日買入

其月ノ買入証唇ト照合所長検印

〇合計何拾帖〇

内

何帖〇

何課渡

何帖〇

何課渡

何帖〇

界紙摺

合計何十何帖〇

差引

何月

〇一何拾何帖〇

◎以下同前 前月ヨリ越高

雜物日々表

◎一品毎ニ如此作ル且残数ハ乃チ越高ハ付略シテ記サス

出納課	
細工紙渡シ帳	
月日	係リ検印
何拾帖何枚 何枚減切摺損	係リ検印
何拾帖	○美濃紙
常用界紙摺	何拾帖
小使受領印納済ノ上 十印ノ如ク消サシム	何拾帖

				三日	二日	何月
				十帖	十帖	越
					二十帖	買入
					三十帖	元合
					五帖	渡
					十五帖	細工
					二十帖	掛合
						残

				三日	二日	何月
				五帖	十帖	越
					二十帖	入
					三十帖	元
					廿五帖	渡
						残



◎諸品渡シ帳ノ初ヘ左ノ箇條ト式ヲ記

諸品受用並ニ返納順序

一諸器物ヲ備品ト称ス

一筆墨紙炭油茶ノ如キヲ雜物ト称ス

一動具並ニ雜物ハ式ノ如ク此帳ノ部分ヘ記載証印致シ受取ヘシ

動具品銘テ一フル○イス○ 硯箱○ 朱硯○ 朱肉入れ○ 錐○ 小刀○ 木入○

一右ノ外ハ品銘並ニ事由ヲ半紙系ニ認メ当課ヘ断リ追テ物品買入渡スヘキ旨通達及ヒ候ハ、式ノ如ク此部分ヘ記シ証印ノ上受取ルヘシ

一既ニ所用ノ諸品交代等ニテ轉去ノ片ハ返納シテ最前ノ印ヲ消抹スヘシ若シ損傷ノ品アレハ式ノ如ク当課ニテ明唇スルニ付後照ノ為メ合印スヘシ

但免官ノ分ハ同課ニテ取調返納有之度

一一課中或ハ二三名兼合所用ノ分初メ主トシテ受取候者轉去ノ片ハ受次ノ者受領加印致スヘシ

一轉課ノ片ハ旧課ノ帳ニ返納消印当務ノ課ニテ更ニ受用スヘシ

一此帳改正ノ節ハ旧帳ヲ消抹シ更ニ新帳ニ記載スヘシ

何課諸品渡帳

出納課

備品ノ部	
何月何日	①
一テーブル	①
何月何日返納①	
何月何日	①
一イス	①
何月何日返納損傷①	
何月何日	①
一イス	①
損傷引換	①

雑物ノ部	
月日	①
一美濃紙	①
月日	①
一筆	①
月日	①
二本	①
月日	①
一美濃紙	①
月日	①
一筆	①
月日	①
二本	①

イ印シハ受領人ノ印ロ印シハ出納課係ノ印ハ印シハ返納ノ出納係受領ノ印返納人ハ最前ノイ印シノ印ヲ消ス又ニ印シハ損傷返納ノ出納課係ノ印ホシハ納人ノ合印而シテ最前ノ受領印ヲ消スヘシ且損傷引換ノキハ式ノ如ク脇唇シ受取最前ノ受領印ハ其尽据置ヘシ故ニ現数調ニハ脇唇ノ廉ハ除ク

郵便扱所受領印帳

新治裁判所

何月何日

一司法省行宅封<sup>①</sup>目方何匁<sup>①</sup>一司法省検事局行一封<sup>①</sup>当検事局<sup>△</sup>目方何匁<sup>①</sup>何封<sup>①</sup>

◎各課ヨリ受取候分ヲ如此  
記載シイ印シノ如ク検印  
シ為持違シロ印シノ如ク  
彼ノ印ヲ取ル且裁判所ト  
ノミ記シタルハ出所ヲ記  
セス

陸運并飛脚受印帳

新治裁判所

何月何日

一何所誰方行宅封<sup>①</sup>一何所出張所行一封<sup>①</sup>当検事局<sup>△</sup>

右奉受取途中無遅滞ニ御届可申上候以上

何ノ誰<sup>①</sup>

◎各課ヨリ受取此記シイ印  
ノ上飛脚ノ者へ渡シ右  
ト名前ヲ記サセロ印ノ如  
ク証印ヲ取ル

郵便切手受拂帳

何 錢

何 錢

貳錢ノ部

月 日

所長ノ検印

○一何百枚○—主任検印

買入

此代金何程

何拾枚○

貼用

此代金何程

差引

一何百何拾枚○

現在有高

此代金何程

有籍囚人入費取立帳

何月何日上納済○—主任検印

何国何郡何町村

一(金何程○—主任検印

何ノ誰

是ハ何月<sup>朝昼</sup>夕<sup>朝昼</sup>ヨリ何日<sup>朝昼</sup>夕<sup>朝昼</sup>マテ賄何食分代金

一金何程○

是ハ渡船賃何度分

一金何程○

是ハ雨具代トカ

合金(何程○何月何日戸長何某ヲ以テ上納方申渡ス  
又ハ何月何日何縣へ上納ノ儀掛合違ス)

上納金受納証書ト課印ヲ割印ス一廉ノ分以上ミ印ノ所へ割印ス而シテ追算簿ニ登記シ所長ノ検印ヲ受ケ最前ノ仮拂ヲ消抹ス

右犯罪捕縛ノ節賄料等立替金取立御廻有之度也(上納可致也)

例文ニ付右書ハ時々署シテ記サス戸長へ渡ス分ハ朱書ノ通り

年号月日

何府  
縣御中

新治裁判所

何村戸長

証

出納課ノ印ヲ以テ  
取立帳ト割印ス  
一金何程

何国何郡何村

何ノ誰

右犯罪捕縛之節賄料等上納金正ニ受取候也

新治裁判所

年号月日

出納課

何府  
縣御中

○各縣へ掛合回來ル分ハ  
本文ノ証書ニ回答ヲ添  
フ其文彼ノ文章ヲ受ケ  
作ルヘシ

証

一 金何程

何国何郡何村ノ誰分  
同村戸長何ノ誰納

右犯罪捕縛之節賄料等上納金正ニ受取候也

年号

月日

新治裁判所

出納課

贓物預リ帳

番号

係検印

一金何程 ○

員数調ノ上之ヲ封シ落着掛ト合印シテ  
貯藏ス正錢ハ左ノ如ク枚数ニテ預ル

一天保錢

○何枚

一何錢

○何枚

一何錢

○何枚

一何品

○員数

一何品

○員数

メ右何月何日預ル

何国何郡何村

誰

右何月何日 〇 出納掛リノ印  
 〇 落着掛受領印  
 落着掛へ返ス

贖罪収贖金収納帳

何月何日

番号

一金何程 〇 係リ検印

番号

一金何程 〇

落着掛合印

小以金何程 〇

何月何日

〇 一金何程 〇

前同断

〇 通計金何程 〇

毎月所長ノ検閲ヲ乞ヒ検印ヲ受ク

◎ 一 科料罰金収納帳ノ式ハ贖罪収贖金収納帳ニ倣ヒ記載スヘシ

◎ 一 贖罪収贖金并科料罰金 色川 尾形 ノ内封金ニテ納ムル

何国何郡何村誰何々ニ付納

前同断

◎ 二 廉以上小以金ヲ記シ二日以上外ニ通計ヲ記シ月々現存ト照合ス

贓物没官帳

番号 何月何日

一金何程○  
——係り検印

一金何程○

一金何程○

天保錢何枚

何国何郡何村

誰

小以金何程○  
——落着掛検印

一何品○

拂代金何程

員数

一何品○

同 金何程

員数

小以金何程

右何月何日何々ニ付没官○  
——落着掛検印

番号 何月何日

○  
——落着掛検印

一金何程○

一何品○

拂代金何程

員数

◎二麻以上小以金ヲ記シ二日以上外  
ニ通計ヲ記シ日々現在ト照検ス



右何月何日何々ニ付没官○

落着掛検印

毎月所長ニ乞ヒ検印ヲ受ク

○通計金何程○

所長検印

○賣却代通計金何程○

◎本省へ納メ期月ニ至レハ賍物ヲ賣却シテ前額ノ加ク一麻毎ニ朱唇シ如此通計ヲ記ス

所長検印

○合金何程○

右ノ外宮繕仕様書諸費渡帳諸拂証書等ノ式ハ爰ニ略ス各前例ニ倣ヒ取計ヘシ

#### 小使職務章程

一 小使ハ当課ノ所轄ニ付百事指揮ニ從ヒ勵精仕役スヘシ且其人員ヲ定メス事務之繁閑ニ依リ適宜増減ス

一 以下五章ヲ上小使ノ職務トス

第一 應用左ニ掲ル諸品ヲ所轄シ若シ損傷スレハ其始末並ニ修理或ハ引換ノ事ヲ断ルヘシ

一 湯呑所用備品

一 火鉢

一 烟草盆

一 糊板

一土瓶

一茶碗

一宿直具

一常用燈具

一厠付手水鉢

第二 界紙或ハ巻紙袋等ニ仕成スヘキ原紙ヲ細工紙渡シ帳ニ記シ授附スルニ付其数ヲ改メ受領印ヲ押シ各自誤ナキ様注意シ製作ノ上納来レハ最前ノ渡シ帳ヘ納済ト記シ係リ検印ス且各課ヨリ申付ル一切ノ紙細工ハ其緩急ニ応シ差支ナキ様製作スヘシ

但萬一摺損或ハ漉切レ等アレハ其紙ヲ別ニ一結トシ原数ノ照檢ニ供スヘシ

以上二章ニ掲ル物品ノ受拂並ニ紙細工用ノ諸機械ヲ帳記シ散失ナキヲ要スヘシ

第三 毎日官員出廳前火鉢甚盆ヲ各課ニ分配シテテーブル等ノ塵ヲ拂ヒ退廳後ハ直ニ取集メ火ノ元懸念ナキ様始末シ而シテ詰所并ニ兩白洲吟味席應接所玄関等迄入念掃除致シ若シ紛乱ノ書類アレハ当直ニ出シ屑紙ハ豫テ備置ク箆ニ投シ散乱ナキ様致スヘシ

第四 湯吞所火ノ元ハ勿論諸事下小使ト共ニ相談示炭油茶ノ支用ニ至ル迄入念取扱無益ノ費無之様致スヘシ

第五 毎夜交番一名宛泊リ番<sup>休日ニハ晝夜詰切</sup>致シ諸事当直ノ指揮ニ從ヒ相務夜中二回<sup>三十時</sup>下小使同伴邸内拍子木ヲ打巡視スヘシ

但風高ノ片ハ何回トナク嚴重見廻ルヘシ

一以下五章ヲ下小使ノ職務トス

第一 日々早朝門前并ニ玄関先ヲ掃除致シ圍外ヲ一周巡視スヘシ

第二 湯呑所ノ用水ヲ汲入レ其他火ノ元ヲ始諸事上小使ト共ニ綿密ニ取扱ヒ官員退廳ノ後ハ日々惣廁ヲ掃除シ別而  
休日ニハ入念平常清潔ナル様注意スヘシ

但手洗水ハ連朝改ムヘシ

第三 諸方使役ハ各課ヨリノ申付ヲ入急兼リ書状等持参品アレハ損失ナキ様注意シ往復遅緩スヘカラス

第四 休日ハ邸内ノ掃除日ト極ム其他モ閑暇ヲ窺ヒ塵芥散乱ナク生草繁茂致サス様見計掃除スヘシ

第五 毎夜交番一名宛泊リ番致シ諸事当直ノ令ニ従ヒ且夜中二回上小使共ニ巡視スヘシ

一上下小使共連日七時ヨリ出廳官員退廳ノ後火ノ元等入念取仕舞退散スヘシ

右ノ外臨時何事ニ限ラス各課ヨリ申付ル儀ハ違背ナク相務メ尤上小使繁ナレハ下小使之ヲ助ケ下小使繁ナレハ上小使  
之ニ代リ諸事用辨差支ナキ様可相心掛也